佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 307 集

'24 第 307 集

TATAMI BATAKE

畳　畑　遺　跡

長野県佐久市鳴瀬畳畑遺跡第 1 次調査報告書

畳畑遺跡

２０２４．３

佐久市教育委員会

佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 307 集

TATAMI BATAKE

畳　畑　遺　跡

長野県佐久市鳴瀬畳畑遺跡第 1 次調査報告書

２０２４．３

佐久市教育委員会

Ｈ１号竪穴建物　鉄滓出土状況

Ｈ４号竪穴建物　遺物出土状況

Ｈ８号竪穴建物　遺物出土状況

口絵

Ｈ１号竪穴建物　出土鉄滓 (鉄分の付着面の反対側は茣の圧痕が顕著である)

畳畑古墳出土直刀 (鉄製) 及び鞘尻金具

口絵

37(原寸)

38(原寸)

39(原寸)

40(原寸)

41(原寸)

42～57(原寸)

99(原寸)

100(原寸)

101(原寸)

102(原寸)

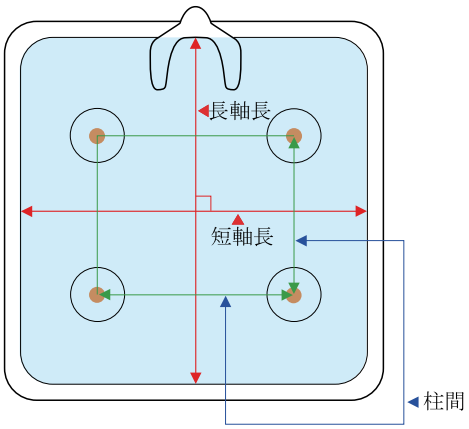
103(原寸)

例　　言

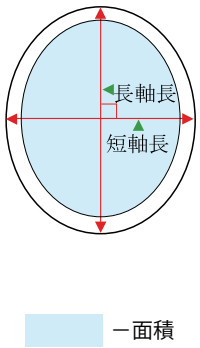
1　本書は長野県佐久市に所在する畳畑遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査は佐久市道路建設課が行う「令和４年度道路メンテナンス事業２号橋本願橋橋梁架替工事」に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
3　遺跡名及び所在地　　畳畑遺跡（NTH）　遺跡番号 203
佐久市鳴瀬 3368、3369、3370、3371、3409-4、3410-5、3410-7、3480-1
4　調査期間及び面積　　発掘調査：令和４年 10 月 25 日～ 12 月６日
整　　理：令和４年 12 月７日～令和６年３月 19 日
調査面積：985㎡
5　本書に掲載した地図は佐久市役所発行の地形図（1：50,000）である。
6　遺構測量は TS を用い３次元データを取得した。取得したデータは株式会社 CUBIC の「遺構くん」により図化した。図面トレースは「遺構くん」で行い、Adobe Illustrator で調整した。写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し Adobe Photoshop で補正等を行った。編集は Adobe InDesign で行った。
7　本書の作成・編集は小林が行った。
8　本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

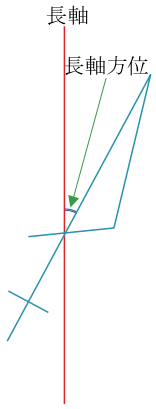
1　挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物 1/4（鉄器・鉄製品は 1/2）を基本とするが、これ以外の物は図中に縮尺を記した。
2　海抜標高は、水糸標高をスケールに「標高」として記してある。また、土色の色調は 1999 年版「新版標準土色帖」に基づいた。
3　遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。面積は床面積、壁残高は最大値である。
4　挿図中の網掛けは以下の表現である。



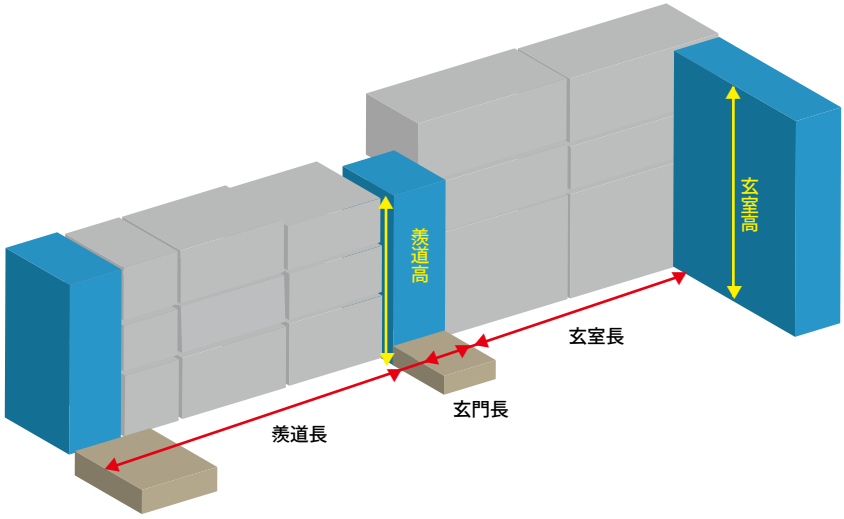
竪穴建物



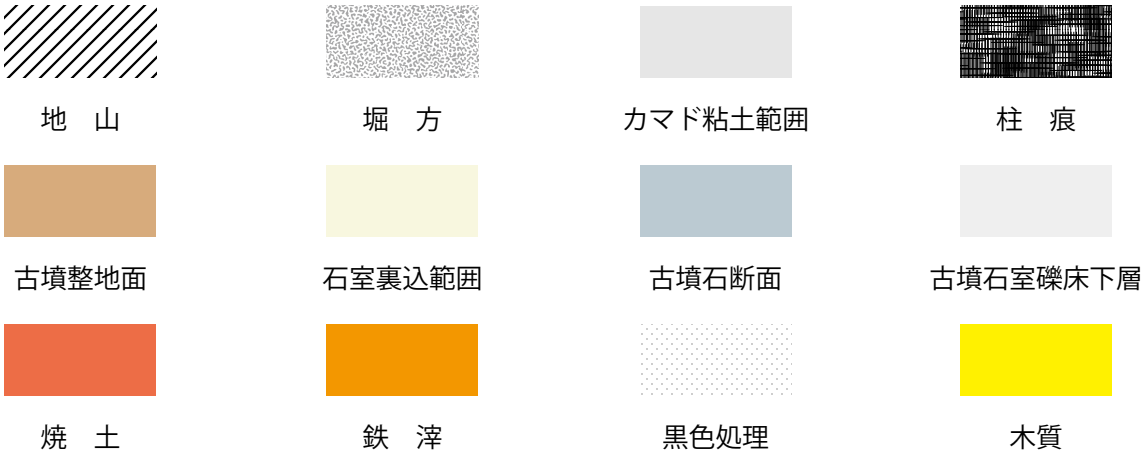
土坑



長軸方位


羨道高
玄室高
玄室長
玄門長
羨道長

古墳石室計測位置


地　山
堀　方
カマド粘土範囲
柱　痕
古墳整地面
石室裏込範囲
古墳石断面
古墳石室礫床下層
焼　土
鉄　滓
黒色処理
木質

目　次

第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… 1
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査体制 …… 1
第３節　調査日誌 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 2
第１節　自然的環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の方法 …… 4
第１節　調査の方法 …… 4
遺跡名・調査区 …… 4
遺跡略記号・遺構略記号 …… 4
遺構測量 …… 4
写真 …… 5
遺構・遺物の整理等 …… 5
報告書 …… 5
第２節　基本層序 …… 5
第３節　検出遺構・遺物の概要 …… 6
検出遺構 …… 6
出土遺物 …… 6

第Ⅳ章　遺構と遺物 …… 6
第１節　竪穴建物 …… 6
Ｈ１号竪穴建物 …… 6
Ｈ２号竪穴建物 …… 7
Ｈ３号竪穴建物 …… 8
Ｈ４号竪穴建物 …… 8
Ｈ５号竪穴建物 …… 10
Ｈ６号竪穴建物 …… 14
Ｈ７号竪穴建物 …… 15
Ｈ８号竪穴建物 …… 17
第２節　石棺・土坑 …… 21
１号石棺 …… 21
Ｄ２号土坑 …… 21
第３節　溝 …… 21
Ｍ１号溝 …… 21
Ｍ２号溝 …… 21
Ｍ３号溝 …… 22
第４節　古墳 …… 22
第５節　遺構外出土遺物 …… 30

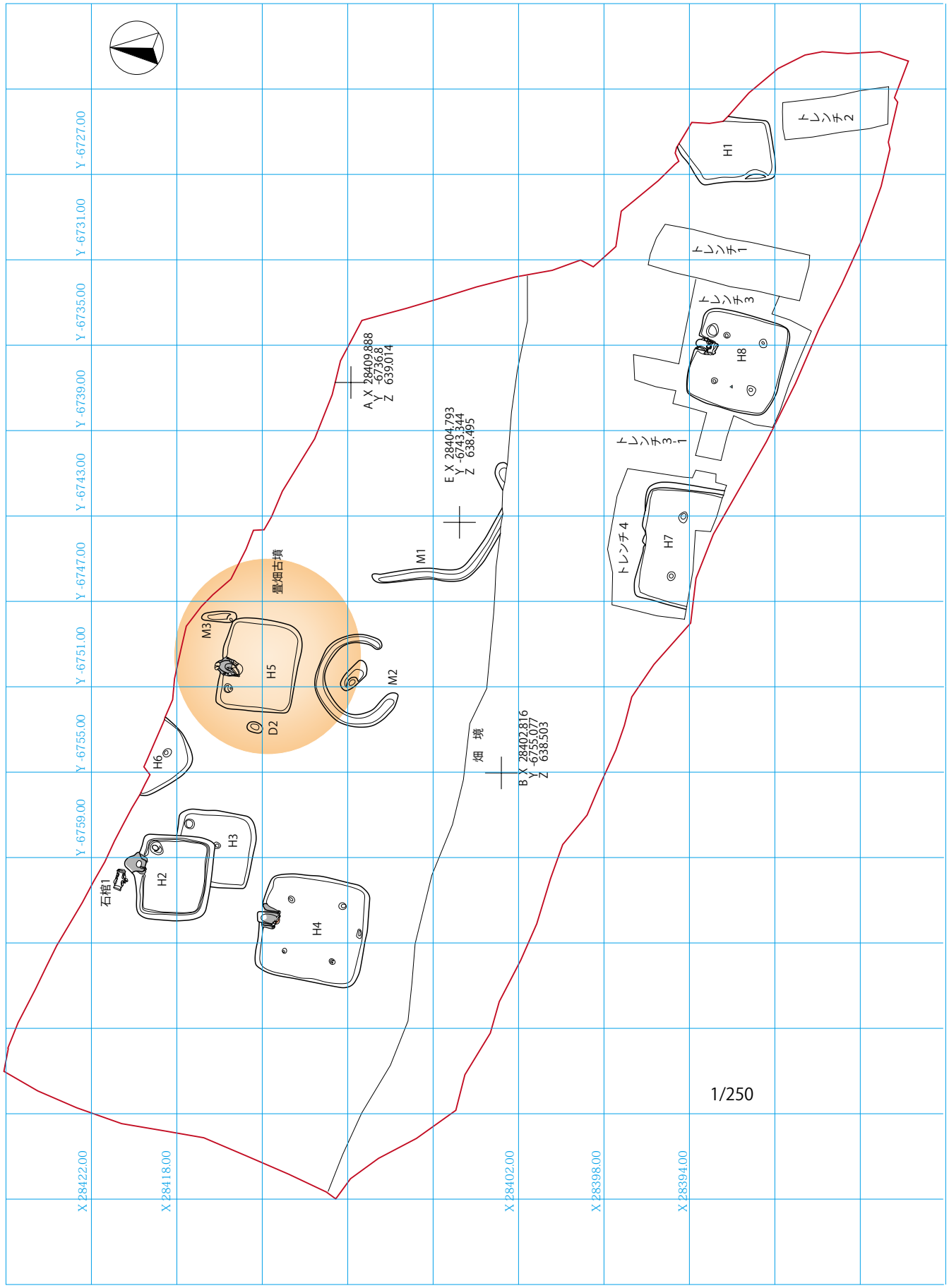
第Ⅴ章　まとめ …… 31

第Ⅵ章　付編 …… 33

表

写真図版

抄録・奥付



畳畑遺跡調査区全体図 (1：250)

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経過

令和４年３月９日佐久市は本願橋橋梁架け替え工事に伴い、文化財保護法第 94 条を佐久市教育委員会に届出た。これを受け佐久市教育委員会は令和４年 10 月 4･5 日に試掘･確認調査を実施し、未周知の塚１基と集落址を確認した。保護協議の結果、記録保存目的の発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査体制

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	吉岡道明
事　務　局	社会教育部	部　長	土屋　孝（R4）　依田　誠（R5）
	文化振興課	課　長	中沢栄二
		企画幹	井上　剛
	文化財調査係	係　長	伊澤信子（R4　６月まで）
			山本秀典（R4　７月から）

第１図　畳畑遺跡の位置 (1：50,000)

係　　冨沢一明　上原　学　久保浩一郎　松下友樹
小林眞寿
調査員　赤羽根篤　岩松茂年　大矢志慕　桐原久人
小池長信　小林喜久子　小林敏雄　清水律子
田中ひさ子　副島充子　宮川真紀子　山村容子
柳沢孝子　油井洋一

第３節　調査日誌

令和４年

３月９日	佐久市から文化財保護法第 94 条第 1 項が提出される。
３月９日	長野県教育委員会に副申。
３月 18 日	長野県教育委員会より通知。
10 月 4・5 日	試掘・確認調査。対象地域で遺構・遺物を確認。
10 月 11 日	試掘調査終了報告。
10 月 12 日	佐久市建設部道路建設課より調査費の概算見積の依頼。
10 月 13 日	概算調査費の見積回答。
10 月 21 日	道路建設課より埋蔵文化財発掘調査の実施依頼。
10 月 25 日	本調査開始。
12 月 6 日	現場調査終了。
12 月 8 日	佐久警察署に埋蔵文化財の発見についての届出。
12 月 28 日	佐久警察署から長野県教育委員会に埋蔵文化財の受領及び認定について通知。

令和５年

３月 24 日	令和 4 年度の調査完了。
３月 30 日	道路建設課より令和 5 年度調査費の概算見積の依頼。
４月３日	概算調査費の見積回答。 道路建設課より埋蔵文化財発掘調査の実施依頼。 令和 5 年度の調査開始。

令和６年

３月 19 日	全ての調査を終了する。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

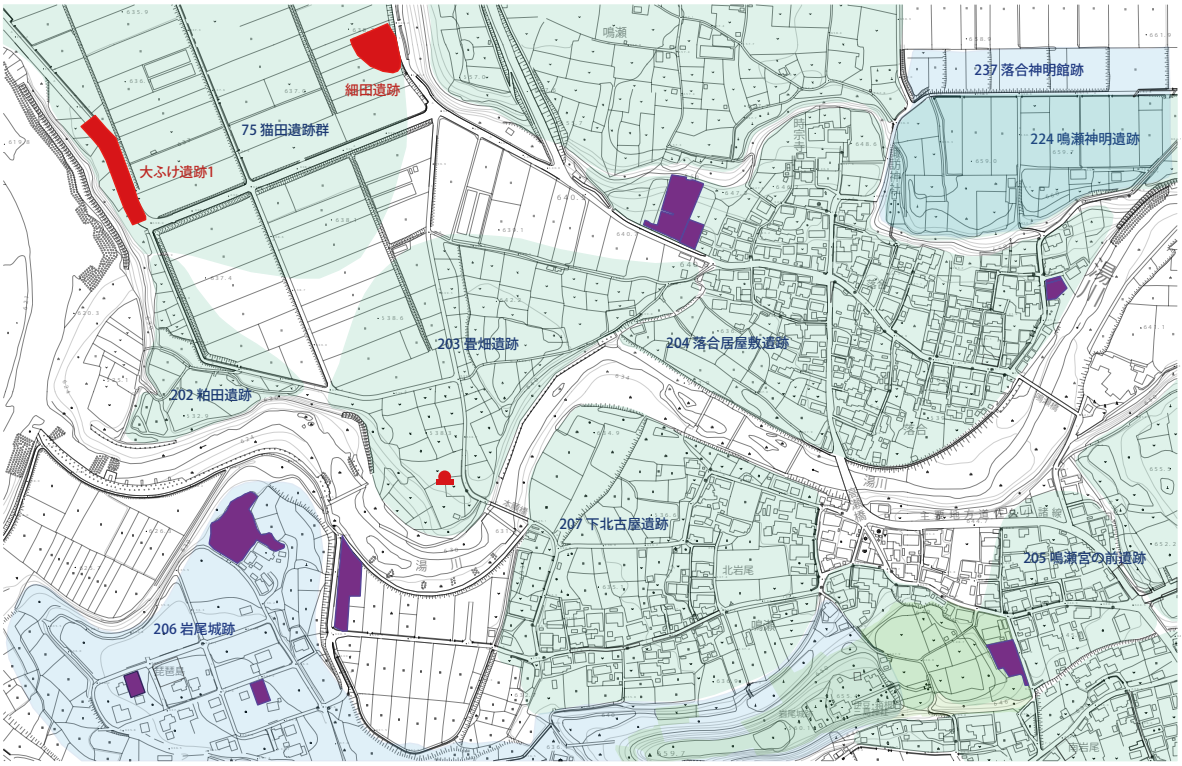
第１節　自然的環境

御代田町梨沢付近で幾つかの河川が合流し規模を増した湯川は、蛇行しながら南下し、岩村田の上ノ城で西に向きを変える。南北に激しく蛇行を繰り返し、浅科の駒寄付近で千曲川に合流し北に

進路を変える。畳畑遺跡はこの合流点直前の北岩尾に所在し、南に大きく蛇行した湯川が作り出した突出した段丘上の緩斜面上に立地する。標高は 630 m後半であり、眼下の湯川からは８ｍほどの比高差がある。この段丘の突出部分は遺跡北方向から延びてきた尾根地形が浸食されずに残った部分であることが、湯川対岸の低地部分に残る、段丘突出部分と相似形の微段丘の存在から推測される。遺跡の地籍は鳴瀬であるが、地形的には「落合」地籍に連なる部分である。「落合」の地名は河や道が合流することが起源らしい。まさしく湯川と千曲川の合流地に落合は存在している。

第２節　歴史的環境

遺跡は湯川右岸の段丘端部に立地するが、この段丘の北東方向には「落合氏」の館跡と推測されている「時宗寺」が存在する。落合氏については諸説が存在するが、根井行親の五男落合五郎兼行が祖であるとする説が有力である。親の根井行親は望月国親の子であるから、落合氏も滋野一族ということになる。そのような背景をもとに落合氏館跡を見ると、根々井と落合の地形が極めてよく似ていることも納得できる。その類似点は南に湯川が流れる段丘上に立地すること、この段丘の背後にはさらに高い段丘が控え、館を構える部分は逆「U」字状に北に向かい抉れていること。奥に控える段丘の東端に城跡が存在する等であり、落合は根々井の小型版と言った様相を呈しているかのようである。落合氏はその後現長野市裾花渓谷に移り、後に葛山衆と呼ばれるようになる。しかし、今のところ付近での調査はなく、関連する遺構・遺物は確認されていない。湯川右岸と言うよりは千曲川右岸と言ったほうが良いかもしれないが、畳畑遺跡の北西に展開する猫田遺跡群では 1976 年に「細田遺跡」、1991 年に「大ふけ」遺跡の調査が行われている。「細田遺跡」は段丘最深部、「大ふけ遺跡」は段丘端に立地する。前者は弥生時代から古墳時代前期の遺構・遺物が、後者からは弥



第２図　周辺遺跡分布図

生時代後期の周溝墓が検出されており、全面に弥生時代後期の遺構群が展開する可能性が強い。その他には「落合居屋敷遺跡」で数回の試掘調査が実施されたが遺構・遺物は確認されていない。また、湯川左岸では「岩尾城跡」で複数回の試掘が行われたが、県史跡範囲内の１回を除き遺構・遺物は確認されていない。「岩尾城跡」は「畳畑遺跡」の南東方向に存在する。1478 年大井行俊が築城したもので、５代目城主の行頼の子大井行吉は武田氏に従軍しており、岩尾城は一時中沢清季が預かっていた。1582 年に武田氏が滅亡すると行吉は後北条氏に臣従する。徳川家康の配下依田信蕃が佐久に侵攻すると岩尾城に立て篭り退けた。この戦いで依田信蕃が討ち死にしている。行吉は柴田康忠の勧めに従い、開城し上州保渡田に去り、岩尾城は廃城となった。

第Ⅲ章　調査の方法

第１節　調査の方法

遺跡名・調査区

佐久市詳細分布図の遺跡に照らし合わせ、畳畑遺跡とした。

遺跡略記号・遺構略記号

遺跡略記号（ＮＴＨ）は以下の決まりに従い付けられている。

○アルファベット３文字の先頭は旧大字のローマ字表記の頭文字である。　Ｎ＝鳴瀬

○アルファベット３文字の２番目は遺跡名のローマ字表記の頭文字である。　Ｔ＝Ｔａ

○アルファベット３文字の３番目は遺跡名のローマ字表記の任意の文字である。Ｈ＝Ｈａ

遺構略記号は以下のとおりであり、佐久市共通である。

Ｈ＝古代以前の竪穴建物址

Ｆ＝掘立柱建物址

Ｄ＝土坑（井戸、陥穴、貯蔵穴等の比較的大径の掘り込み）

Ｐ＝ピット（柱状のものを建てたと思われる、多くは小径の掘り込み）

Ｍ＝溝址（環濠、水路、道路、堀等）

遺構調査

竪穴建物は均等に４分割し、対面する２区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・炉・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は４分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続する No を付け３次元の記録を行い取り上げた。

古墳も竪穴建物と基本的に共通である。

土坑は長軸方向に沿って２分割し、土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は分割した区毎に東西南北の英語頭文字を付し取り上げた。

ピットも土坑と同様であるが、遺物は遺構 No で一括した。

溝址･周溝墓は短辺方向に任意の場所で区分し､土層を観察･記録した。遺物は区毎に取り上げた。

遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともにトータルステーションを用い３次元データを取得した。取得したデータは株式会社ＣＵＢＩＣの「遺構くん」により図化した。測量基準座標は３次元座標を持たせた杭を任意の地点に打設して用いた。

写真

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによる RAW 画質モードと、35㎜一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、データの状態で報告書に使用した。

遺構・遺物の整理等

遺構の図面修正は株式会社ＣＵＢＩＣの「遺構くん」により行った。

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で自然乾燥させた。

注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。

遺物の接合はセメダインＣを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ樹脂 XNR6504・XNH6504 を用いた。

金属器については、バキュウムシーラによるパックで現状保存した。

遺物実測は手取りと、デジダル一眼レフカメラで撮影した画像を Adobe 社製「Photoshop」で補正した写真実測を併用して行った。

遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

報告書

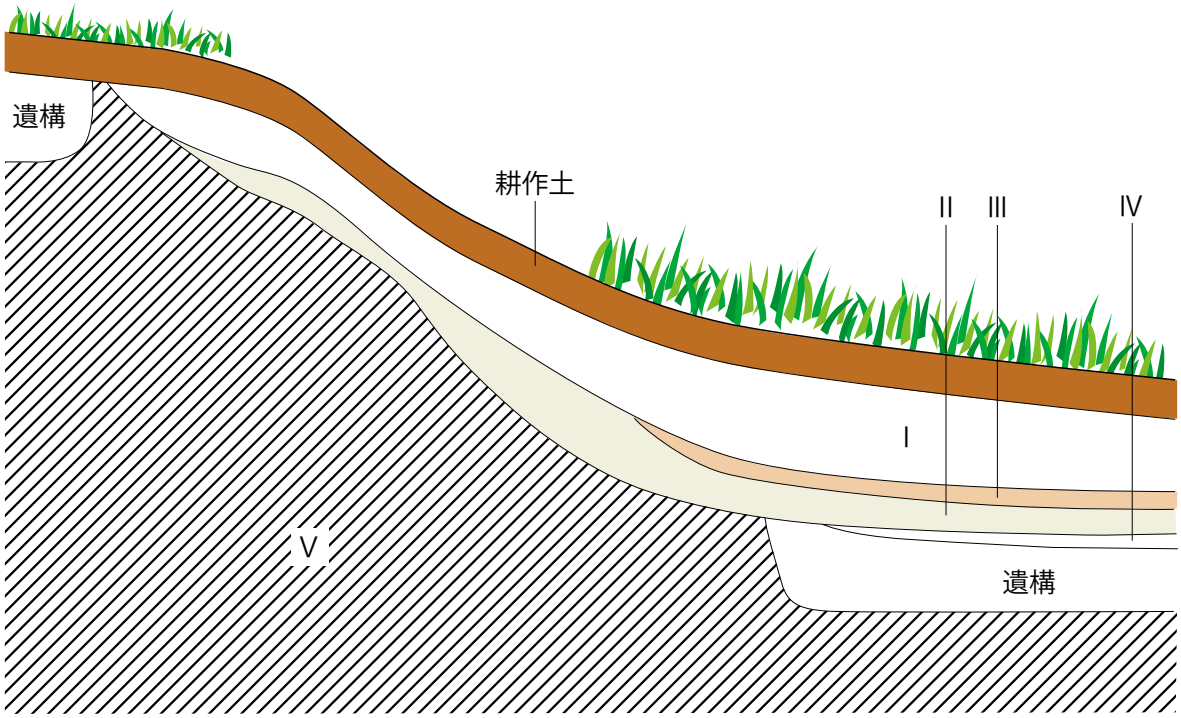
文章は InDesign に直接打ち込んだ、表については MS 社製「Excel」で作成した。また、遺物実測図は Adobe 社製「Illustrator」によりデジタルトレースを行い、写真・拓本は Adobe 社製「Photoshop」により補正加工を行った。古墳石室内の展開写真は Agisoft 社製 Metashape を用い作成した３Ｄデータを CloudCompare でオルソ化した。これらのデータを Adobe 社製「InDesign」でレイアウトし、印刷原稿を作成し入稿した。

第２節　基本層序

基本層序は第３図のとおりである。

Ⅰ黒褐色土層 (10YR3/2 ～ 2/2)　礫及び土器片を含む。
Ⅱ黒褐色土層 (10YR3/2)　シルト (10YR5/3)、砂粒 (10YR8/4) 含。
Ⅲにぶい黄褐色土層 (10YR5/3)　シルト質土。
Ⅳ黒褐色土層 (10YR2/2)　砂粒含。貼床状に固い。
Ⅴ浅黄橙色土層 (10YR8/4)　砂質土。

調査区は湯川にせり出した尾根が段丘化しており、南に向かい傾斜している。遺構は段丘深部では耕作土直下で検出されるが、尾根端部に近づくとシルト質土層を含む複数の土層下が検出面となる。比較的短時間で埋没したらしく、端部では遺構の状態は良好であったが、深部では耕作等の影



第３図　基本層序模式図

響が強く認められた。

第３節　検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物の概要は以下の通りである。

検出遺構

竪穴建物 (古墳時代) －８軒、土坑－１基、石棺－１基、溝－３条、古墳－１基

出土遺物

縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器・石製品、金属器、土製品、玉類、人骨

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴建物

Ｈ１号竪穴建物 (第４図)

調査区東端で検出された。北東方向に向かい調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高 0.56 mの規模であった。カマド、周溝、柱穴等の付属施設は有さない。遺構の平面は不整な長方形で断面は鍋底である。遺構中央部分の堀方部分は円形のピット状に窪んでいた。この部分の上部覆土には焼土塊や鉄滓（苆を混ぜ込んだ粘土がレンガ状に焼締まった塊の表面に鉄分が付着したもの）が出土した。原型はとどめていないが、製鉄炉の炉体の一部分の可能性が強い。ただ、炭化物や所謂「ノロ」が流れた痕跡は認められなかった。

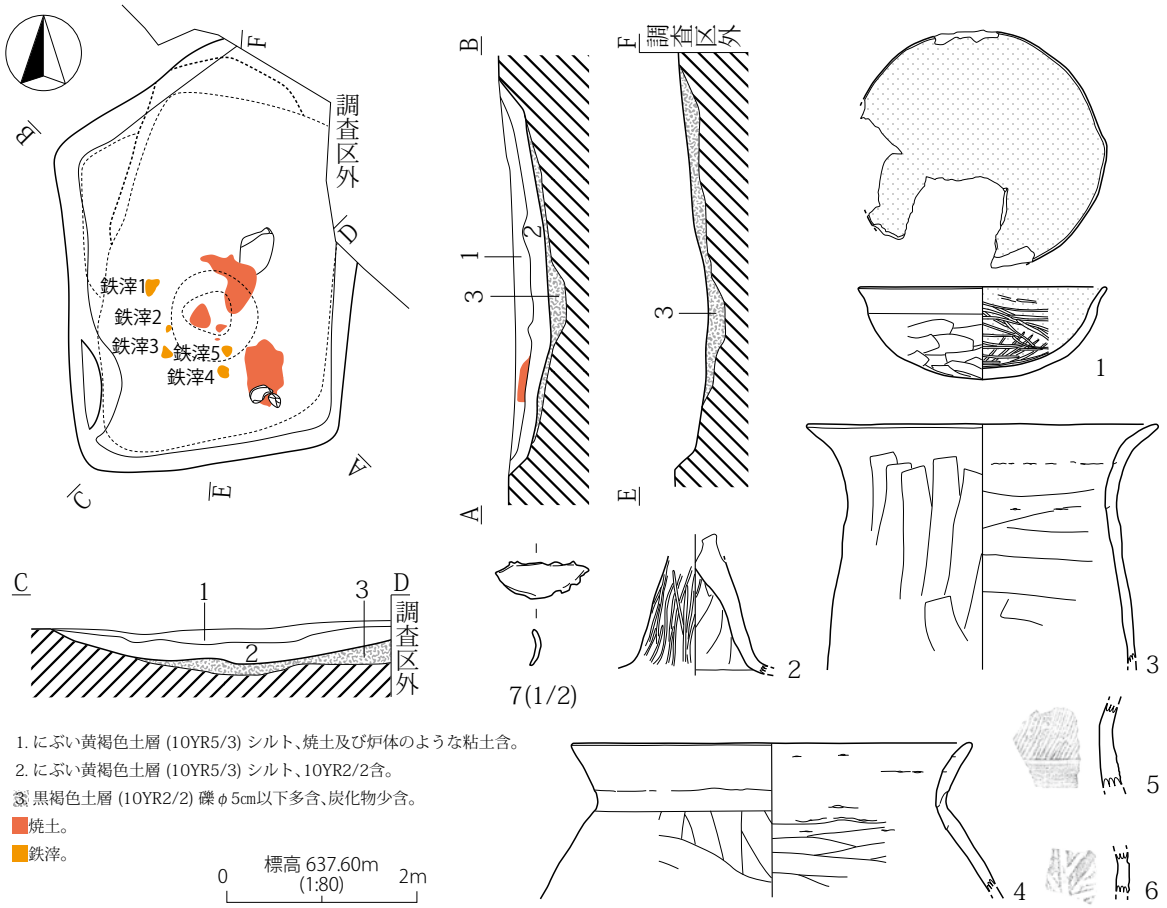
遺物は弥生土器、土師器、鉄製品、鉄滓が出土している。土師器には坏、高坏、甕の器種が認められる。坏は内面－ミガキ後黒色処理、外面－ケズリ調整が施される。口唇部が一ヶ所つまみだされ、片口を形成している杓状坏である。器形的には半球状の体部から口縁部が短く外反するものである。高坏は外湾気味の脚部片で、外面ミガキ調整が施される。甕は口縁部に最大径を有する３と、体部に最大径を有する４の２点が出土した。どちらも外面－ケズリ、内面－ナデ調整である。鉄製品は外湾する厚さ 1.5 mmの小破片であるが、器種は不明である。弥生土器は後期の甕と壺の小破片が１点づつ出土した。混入品である。鉄滓は写真のみ掲載した。

以上の出土遺物の特徴から本址は６世紀前半の所産と思われる。

Ｈ２号竪穴建物（第５図）

調査区北端で検出された。H3 号竪穴建物を切る。長方形の平面形態で、主軸をＮ－ 11°－Ｅにとる。長軸長 3.31 m、単軸長 2.71 m、壁残高 0.5 m、面積 8.86㎡の規模である。壁下には周溝が巡り、北東隅に貯蔵穴と思われるピットが１基存在する。カマドは北辺の中央東寄りに石芯を粘土で被覆して構築される。

遺物は土師器と石器が出土している。土師器には坏、高坏、小型甕、甕、甑の器種が認められる。坏は須恵器坏蓋模倣形態のもの、半球状の体部から口縁部が短く外反するもの、平坦な底部から口縁部が大きく外反する形態のものが存在する。調整は須恵器坏蓋模倣形態のものが外面ケズリ、内面ナデ、半球状の体部から口縁部が短く外反するものが内外面ミガキで内面黒色処理、平坦な底部



第４図　H1 号竪穴建物

から口縁部が大きく外反する形態のものが外面ケズリ、内面ミガキ後黒色処理である。高坏は脚部が２点出土している。２点共に外面ミガキ調整で、脚の裾が屈曲して広がり、その上部は僅かに外湾する。小型甕は砲弾型で、口縁部が短く僅かに外反して開口する。最大径は体部に有するが、口径との差は僅かである。粘土紐の接合痕が比較的顕著で、外面ケズリ、内面ナデ調整が施される。甕は底部しか残存しないが、胴張の形態と思われる外面ケズリ後ケズリにより生じた稜をミガキでツブしている。甑は同一個体であるが接合できない。口縁部に最大径を有する。底部が大きく開口するもので、内外面共にミガキが施される。石器は磨石と敲石が各１点出土した。

以上の出土遺物の特徴から本址は６世紀後半の所産と思われる。

Ｈ３号竪穴建物（第６図）

調査区北端で検出された。H2 号竪穴建物に切られる。正方形の平面形態で、主軸をＮ－ 11°－Ｅにとる。長軸長 3.01 m、短軸長 2.87 m、壁残高 0.4 m、面積 9.80㎡の規模である。壁下に周溝は認められない。北東隅に貯蔵穴と思われるピット１基と、竪穴中央に１基の計２基のピットが存在する。カマドは北辺の中央に存在すると思われるが、H2 により消失している。

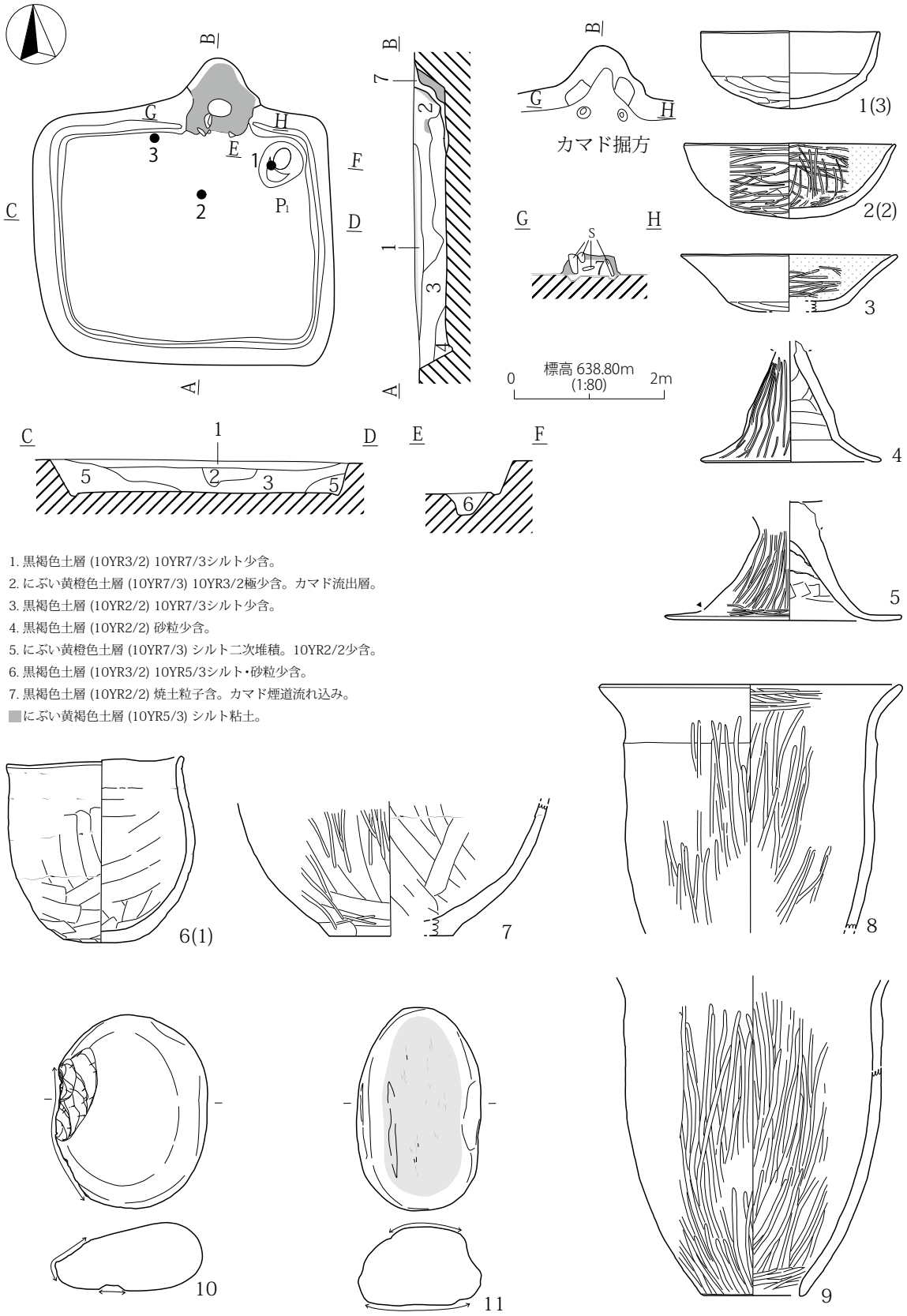
遺物は土師器と縄文土器が出土している。土師器には坏、甕、甑の器種が認められる。坏は浅い球状の底部から口縁部が大きく外反し開くもので、底部と口縁部の境には強い稜が形成される。外底がケズリ調整の他はミガキ調整で、内面には黒色処理が施される。甕は小型のものと、大型のものがあり、小型のものは頸部のくびれがなく浅いため鉢状である。大型のものは口縁部に最大径を有する長胴のものである。甑は身が深いものと、浅いものがあるが、どちらも口縁部に最大径を有し、底部全体が開口する。内外面ミガキ調整で、内面黒処理が施される。縄文土器は後期堀之内式の鉢である。

以上の出土遺物の特徴から本址は６世紀中葉の所産と思われる。

Ｈ４号竪穴建物（第７・８図）

調査区西端で検出された。他遺構との重複関係は認められない。正方形の平面形態で、主軸をＮ－ 12°－Ｅにとる。長軸長 4.28 m、短軸長 4.06 m、壁残高 0.56 m、面積 20.45㎡の規模である。壁下に周溝は認められない。カマドは北辺中央部分に石芯を粘土で被覆して構築される。主柱は均等に配置される P1 ～ P4 の４基であり、柱間寸法は 2.49 mである。南壁下中央に構築される P5 は出入口施設と思われる。

遺物は土師器と石器、鉄器が出土している。土師器には坏、高坏、鉢、甕、壺、甑の器種が認められる。坏は浅い球状の底部から口縁部が大きく外反し開き、底部と口縁部の境に強い稜が形成されるものが主体であるが、須恵器坏、坏蓋の模倣形態や、半球状のものも混在する。内面ミガキ、黒色処理が１点を除き施されている。高坏は脚部片２点､坏部片１点が図化出来た。脚部は外湾し、坏部には暗文状のヘラミガキが施される。鉢は坏を大型化した形態ものと、小型甕と同様な口縁部が大きく開く形態のものが存在するが、後者は内面の黒色処理をもって鉢とした。甕には小型のもと大型のものが認められる。小型のものは鉢で前述した形態のものである。大型のものは、長胴で体部中央が緩やかに外湾し、口縁部に最大径を有する形態で、外面にはケズリ、内面にはナデ調整が施される。また底部に木葉痕が認められるものも顕著である。壺は短頸、球胴で外面ミガキ調整が施される 24・26 の他に、口縁部が有段となる 25 がある。24 は頸部に焼成後穿孔が１孔ある。



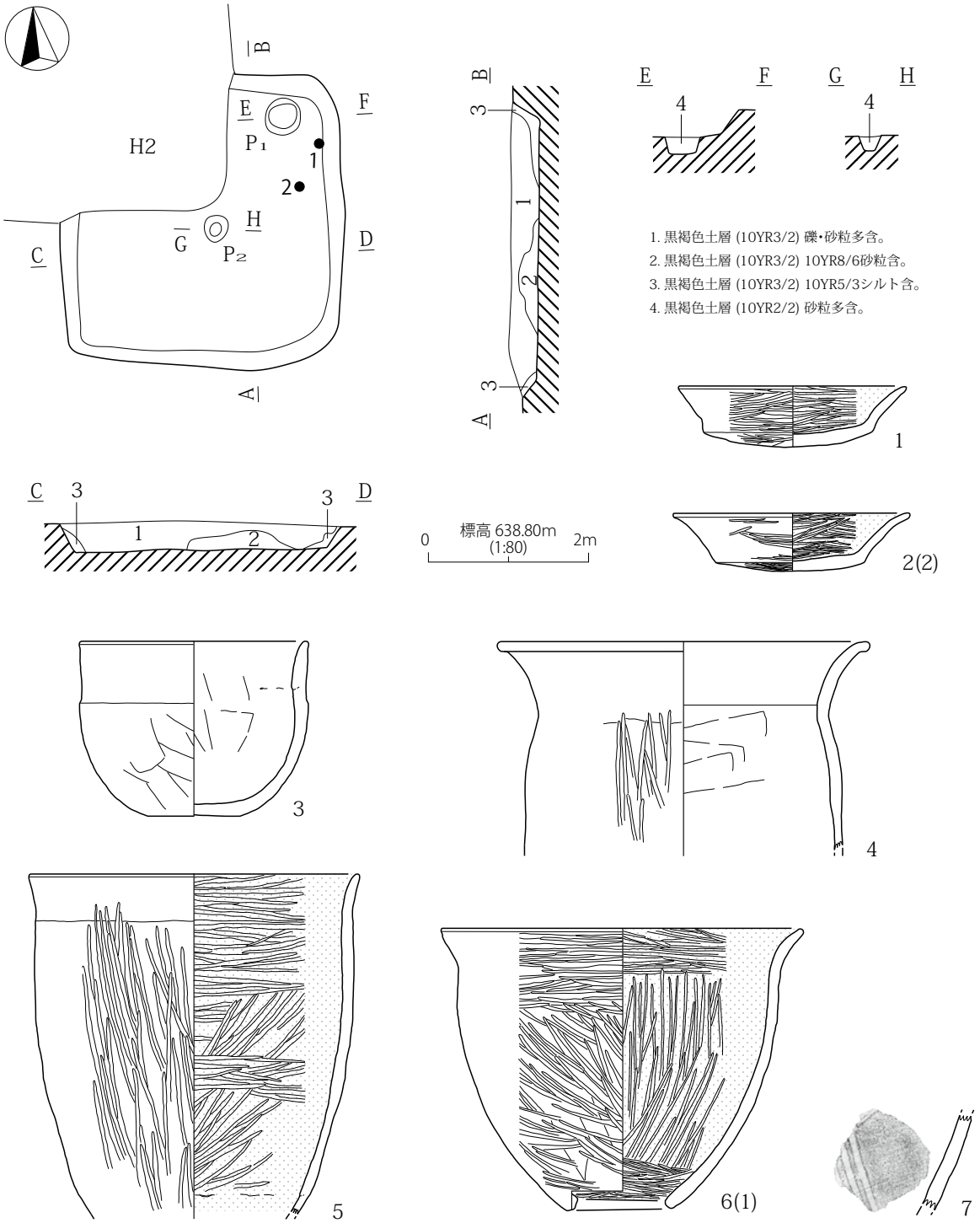
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/3シルト少含。
2. にぶい黄橙色土層 (10YR7/3) 10YR3/2極少含。カマド流出層。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/3シルト少含。
4. 黒褐色土層 (10YR2/2) 砂粒少含。
5. にぶい黄橙色土層 (10YR7/3) シルト二次堆積。10YR2/2少含。
6. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/3シルト・砂粒少含。
7. 黒褐色土層 (10YR2/2) 焼土粒子含。カマド煙道流れ込み。
■にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) シルト粘土。

第 5 図　H2 号竪穴建物

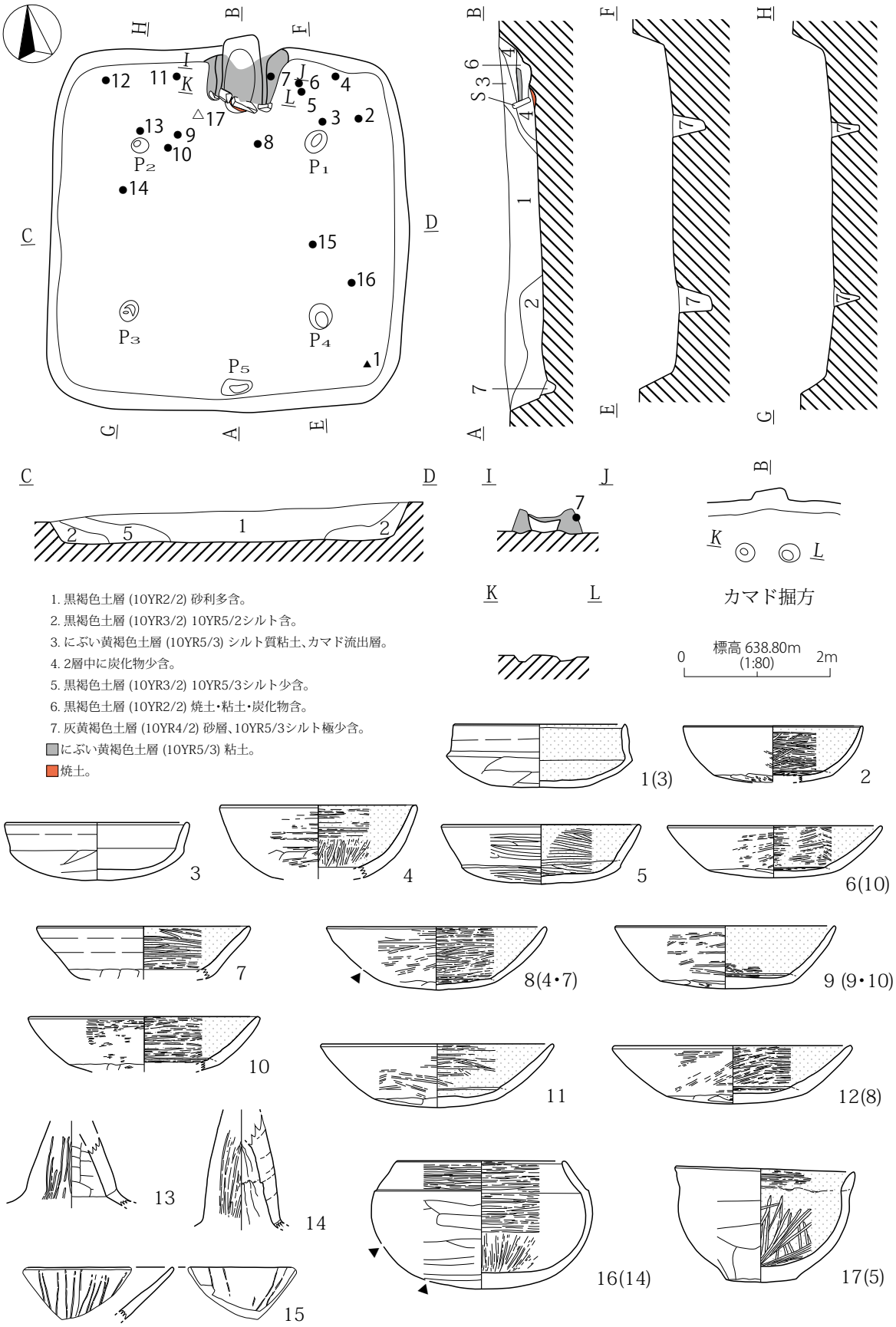
甑は底部中央に１孔が穿たれるもので、逆位の「兜」状の形態である。石器は台石、磨石が、鉄器は鏃が１点出土している。

以上の出土遺物の特徴から本址は６世紀中葉の所産と思われる。

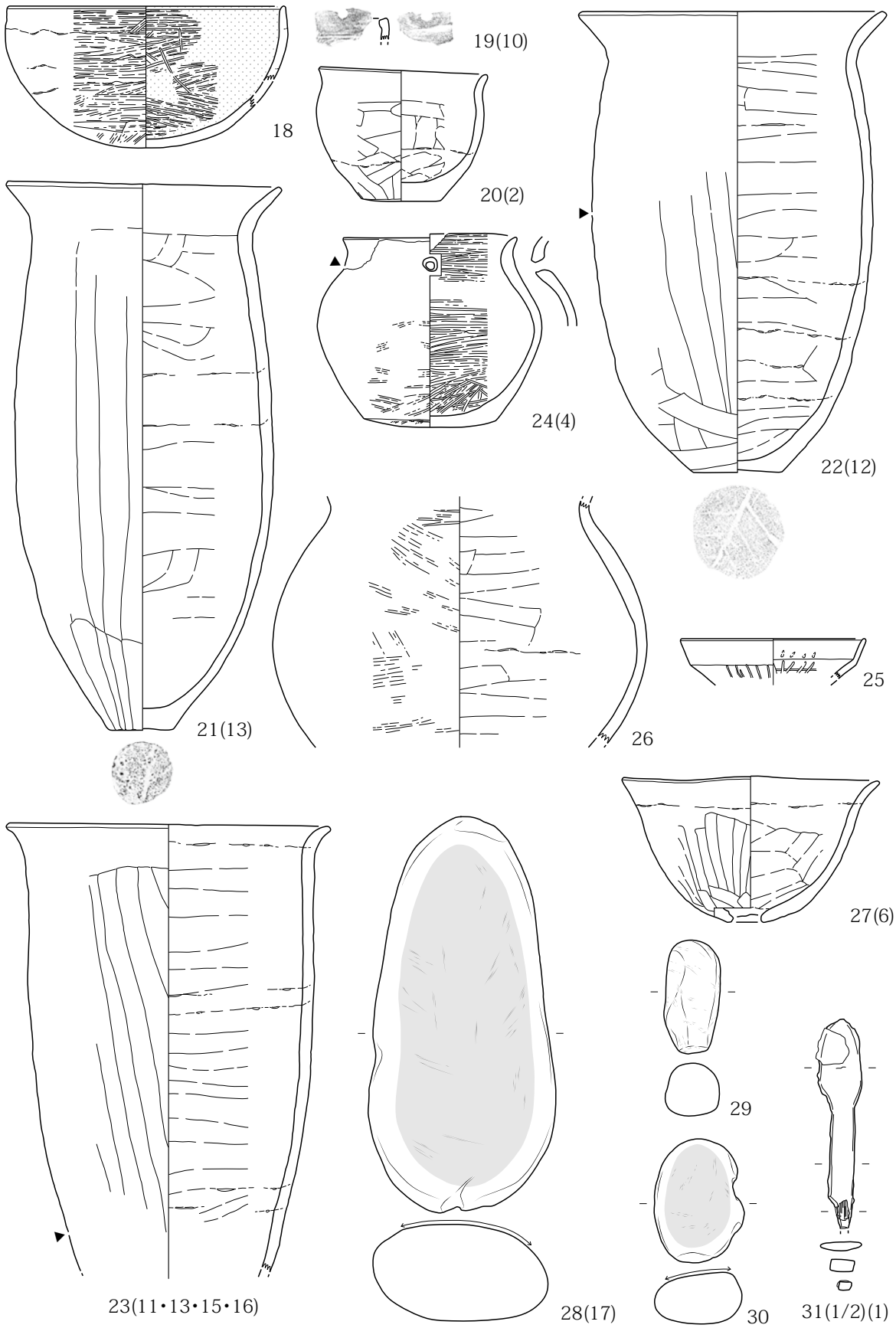
Ｈ５号竪穴建物（第９・10図）



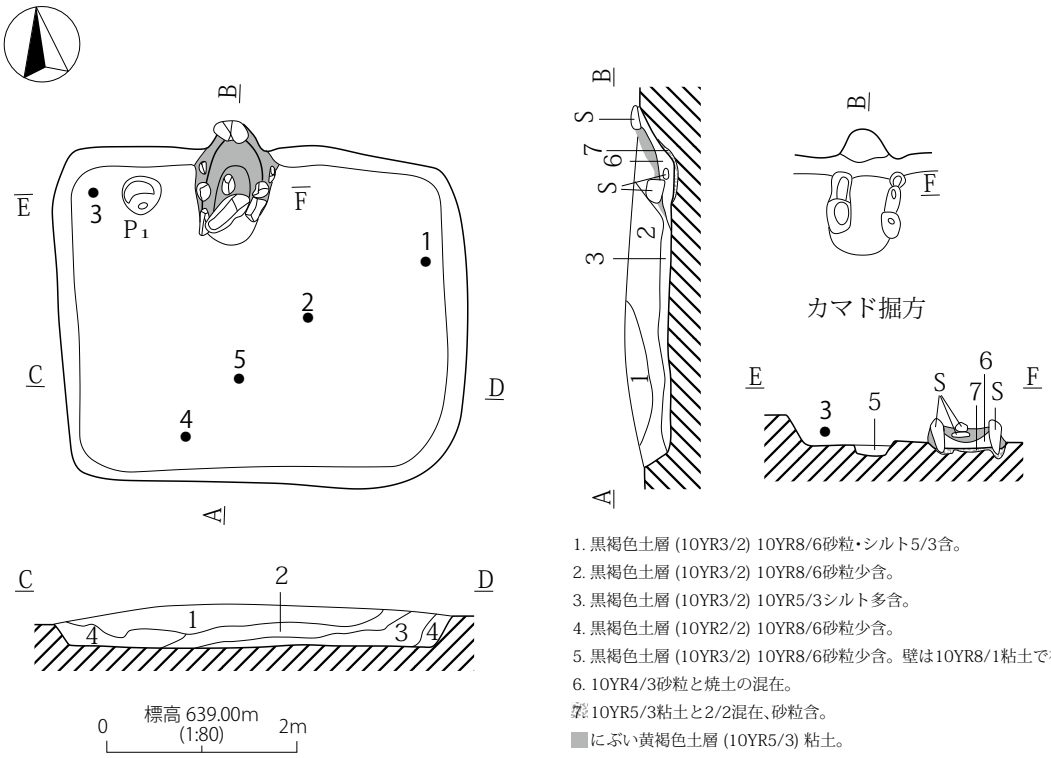
第６図　H3 号竪穴建物



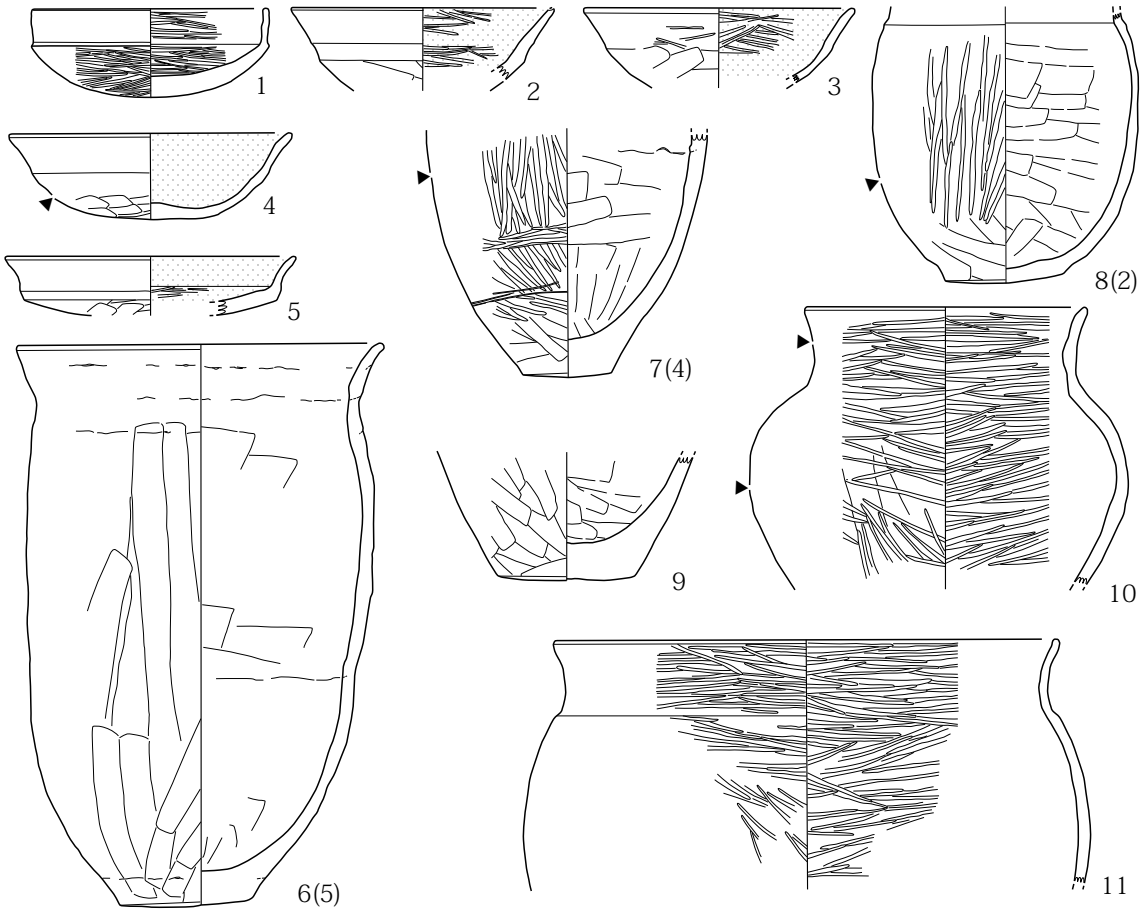
第 7 図　H4 号竪穴建物 (1)



第 8 図　H4 号竪穴建物 (2)



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR8/6砂粒・シルト5/3含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR8/6砂粒少含。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/3シルト多含。
4. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR8/6砂粒少含。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR8/6砂粒少含。壁は10YR8/1粘土で補強。
6. 10YR4/3砂粒と焼土の混在。
7. 10YR5/3粘土と2/2混在、砂粒含。
■ にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 粘土。



第 9 図　H5 号竪穴建物 (1)

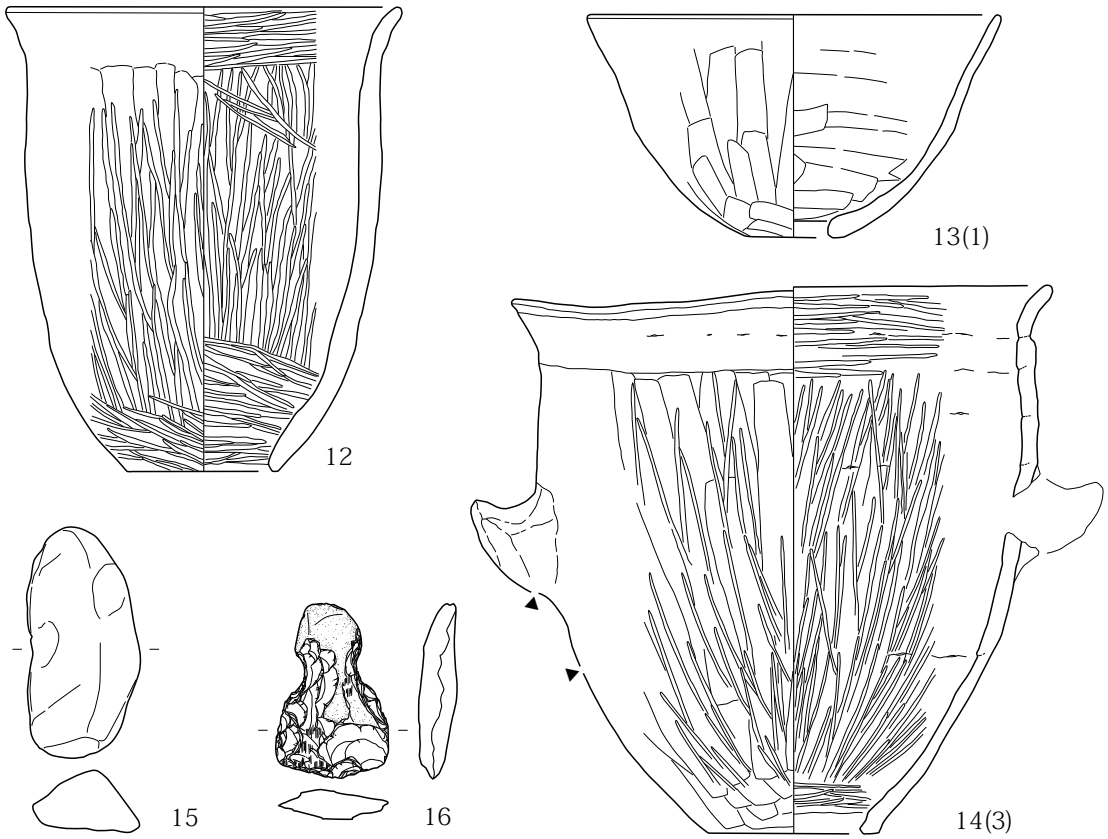
調査区北端中央で検出された。本址埋没後古墳が構築されている。長方形の平面形態で、主軸をN－11°－Eにとる。長軸長3.79 m、短軸長2.87 m、壁残高0.39 m、面積12.19㎡の規模である。壁下に周溝は認められない。カマドは北辺中央やや西寄に石芯を粘土で被覆して構築される。北西隅の壁下にピット1基が検出された他はピットは存在しない。

遺物は土師器と石器が出土した。土師器には坏、甕、壺、甑の器種が認められる。坏は浅い球状の底部から口縁部が大きく外反し開き、底部と口縁部の境に強い稜が形成されるもの、須恵器坏、坏蓋の模倣形態のものが存在する。内面ミガキ、黒色処理が1点を除き施されている。甕は全て長胴で、底部が突出するものが主体である。調整は外面ケズリ、内面ナデが基本であるが、外面のケズリ調整により生じた稜をツブスようなミガキが施されるものも存在する。壺は球胴で、広口の形態である。内外面ミガキ調整が施される。甑は大型で把手が付くもの、中型で長胴甕の底部を解放した形態のもの、小型の逆「兜」状の形態で単孔のものが存在する。石器は編物石と打製石斧が各1点出土している。

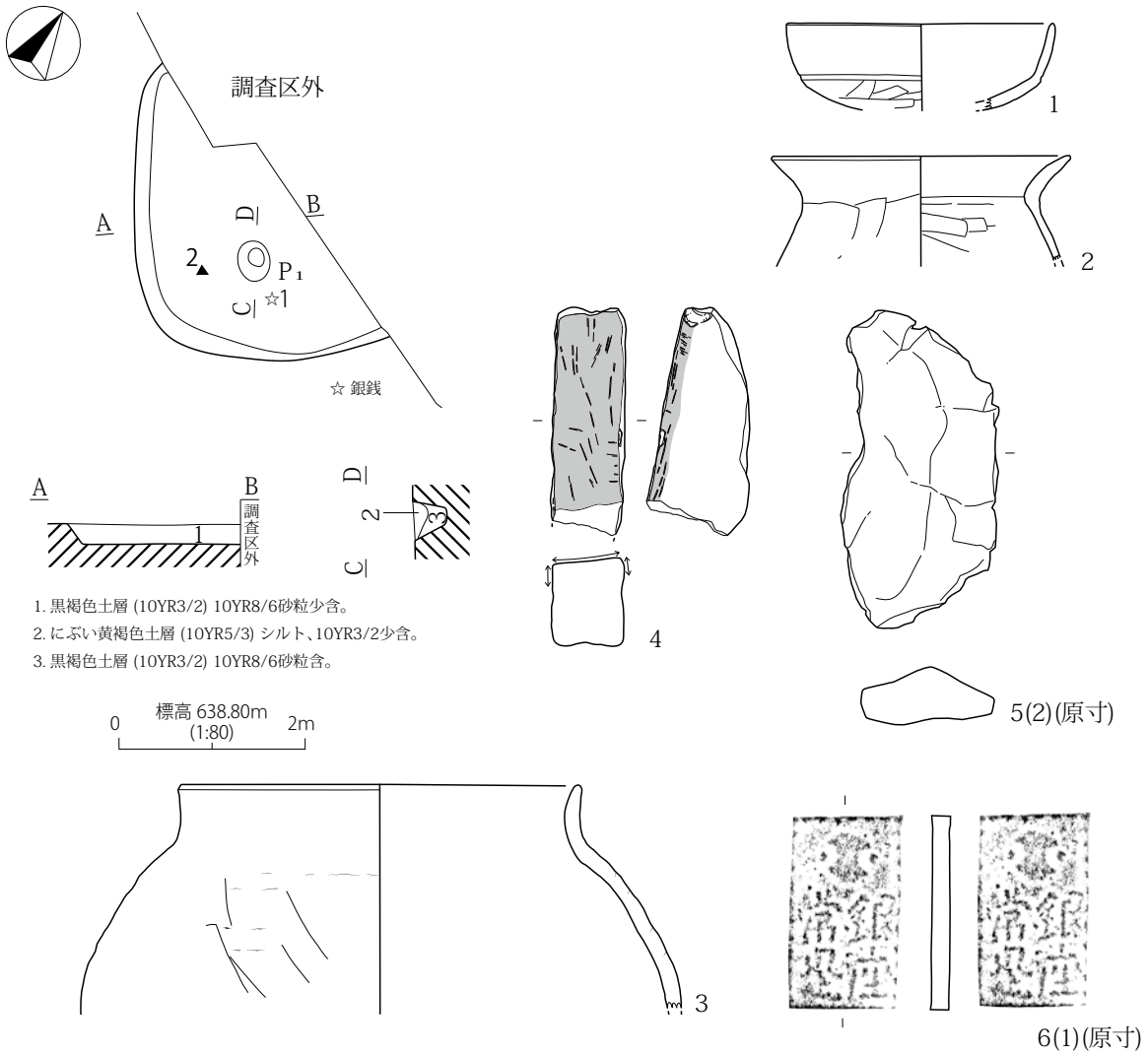
以上の出土遺物の特徴から本址は6世紀中葉の所産と思われる。

H 6号竪穴建物（第11図）

調査区北端中央付近で検出された。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。検出範囲においては他遺構との重複関係は認められない。壁残高0.25 mの規模である。壁下に周溝は認められない。検出範囲にはカマドは存在しなかった。ピットは床面上に1基が検出されたが、性格は不明である。



第10図　H5号竪穴建物(2)



第 11 図　H6 号竪穴建物

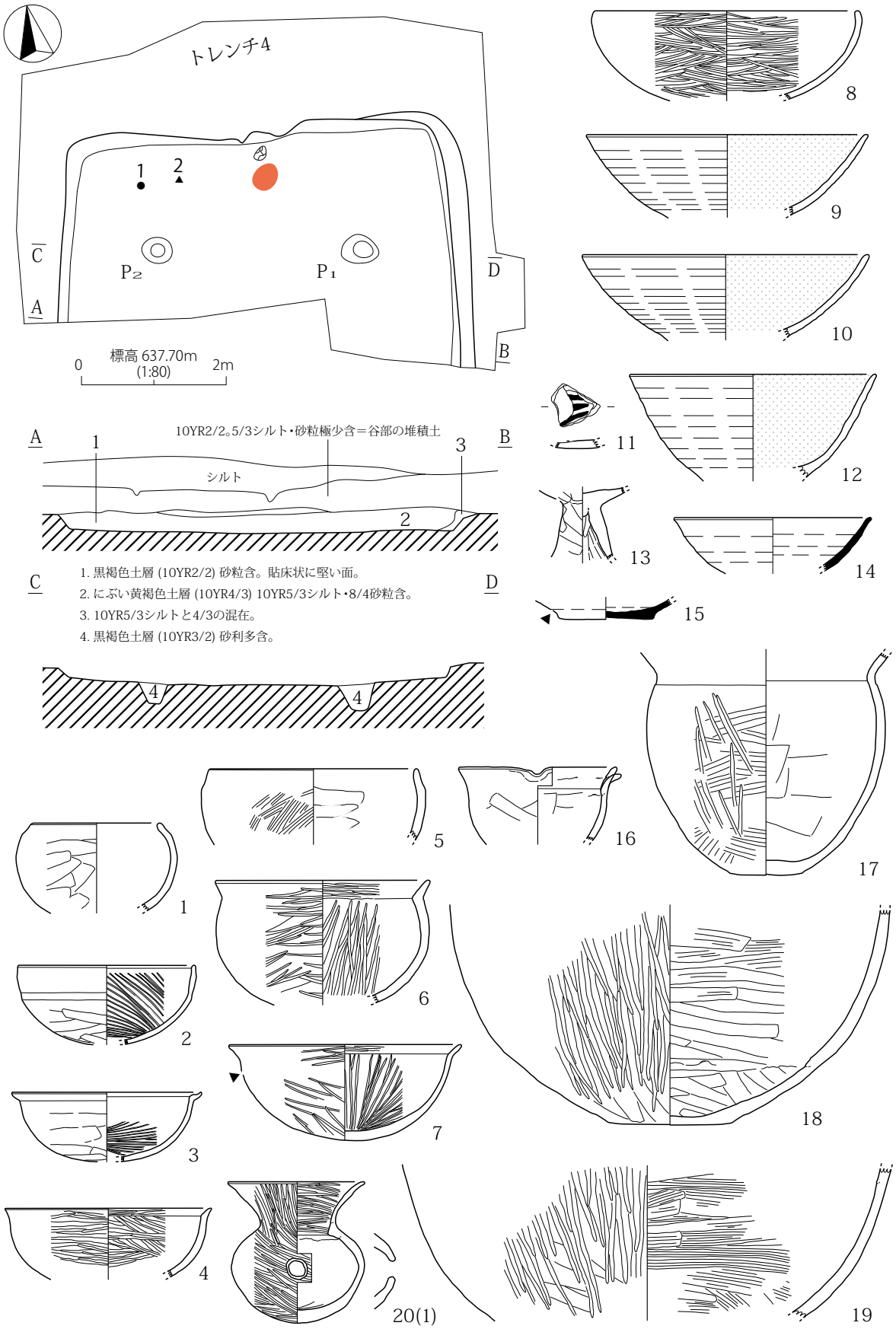
遺物は土師器、石器、鉄塊、銀銭が出土した。土師器には坏と甕の器種が認められる。坏は須恵器坏蓋模倣形態、甕は長胴を呈する 2 と、胴張形態の 3 が存在する。石器は磨石が 1 点、鉄塊は不整形な小型のものが 1 点出土している。銀銭は江戸時代の二朱銀であり混入品である。

以上の出土遺物の特徴から本址は 6 世紀前半の所産と思われる。

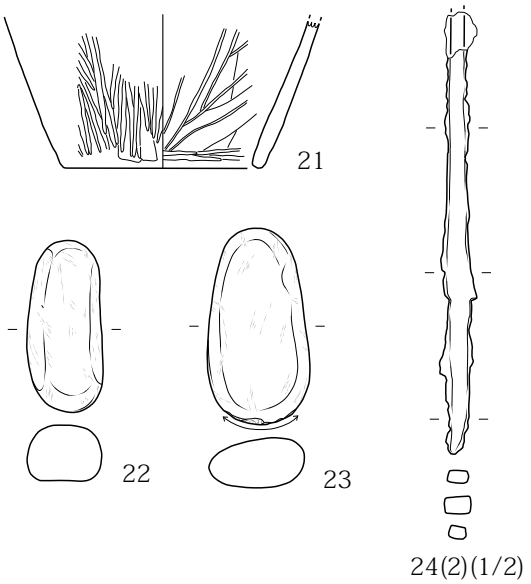
H 7 号竪穴建物 (第 12・13 図)

調査区南端中央付近で検出された。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。検出範囲においては他遺構との重複関係は認められない。壁残高 0.44 mの規模である。東壁には小規模な段差が存在するが、覆土の堆積からは別遺構との重複ではないことが確認された。壁下に周溝は認められない。北辺の中央壁下にはカマド火床部と思われる焼土が存在した。ピットは床面上に 2 基が検出された。主柱穴と考えられる。

遺物は土師器、須恵器、石器、鉄器が出土した。土師器には坏、碗、高坏、鉢、甕、壺、ハソウ、甑の器種が認められる。坏には身の深い半球状のもの、半球状の体部から口縁部が短く外反す



第 12 図　H7 号竪穴建物 (1)



第 13 図　H7 号竪穴建物 (2)

るものが認められる。暗文状のミガキを内外面に施すものが多い。9・10 は平安時代のものであり、碗 12、須恵器坏 14・15 と共に混入品である。土師器 11 については小片であり、時期は判然としないが、内面の墨書状の文様が稀有なため図化した。高坏は坏部と脚部の接合部分の破片でであり、形態はよく分からない。鉢は小型で広口の小型甕と同様な形態である。片口が作り出されているため鉢とした。甕は小型で最大径を口縁部に有するものと思われる。外面ハケメ→ミガキ、内面ナデ調整が施される。壺は 2 点共に底部片である。18 は底部と体部の変換点に弱い稜を形成する。外面ミガキ、内面ナデ調整が施される。ハソウは口縁部が有段にならない形態である。甑は底部片である。底部全体が開放する。石器は磨石と磨・敲石が、鉄器は鏃が出土している。

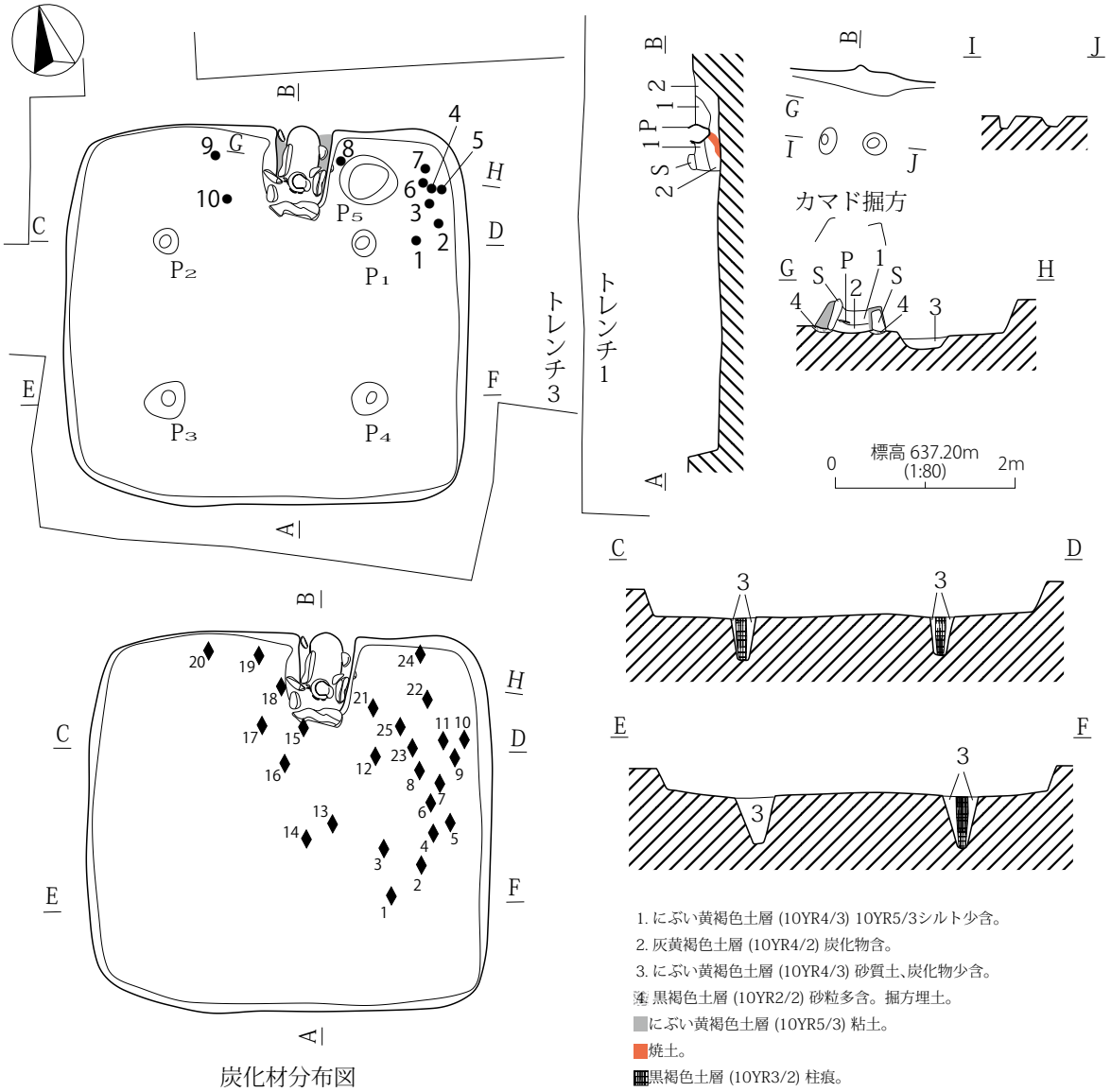
以上の出土遺物の特徴から本址は 5 世紀後葉の所産と思われる。

H 8 号竪穴建物 (第 14・15・16 図)

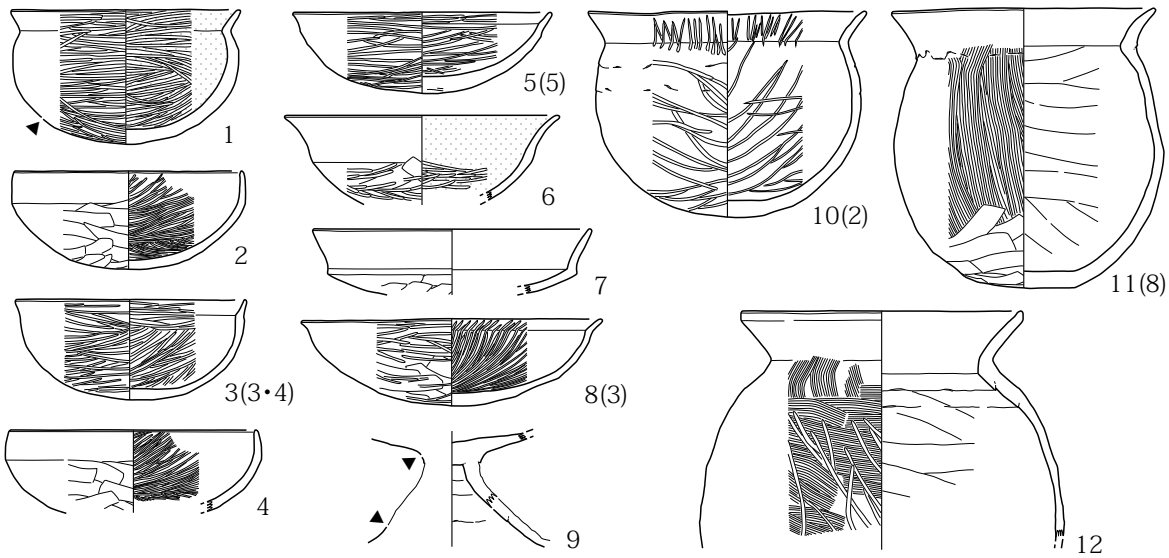
調査区南端東側で検出された。検出範囲においては他遺構との重複関係は認められなかった。正方形の平面形態を呈し、N － 20° － E に主軸方位をとる。長軸長 3.71 m、短軸長 3.69 m、壁残高 0.43 m、面積 16.78㎡の規模である。壁下に周溝は認められない。カマドは北辺の中央に石芯を粘土で被覆して構築されていた。床面上均等に配置された P1 ～ P4 の 4 基のピットが主柱穴であり、φ 12㎝の柱痕が確認された。カマド東脇に構築された P5 は貯蔵穴である。本址は消失建物であり、床面上に炭化材が散乱していた。また、出土土器にも内面の黒色処理の消失や熱による歪みが認められた。

遺物は土師器、石器、石製品と混入品の弥生土器の甕片が出土している。土師器には坏、高坏、鉢、甕、壺、甑の器種が認められる。坏は半球状の体部から口縁部が短く外反するものや、直立するものが主体であるが、口縁部が大きく外反するものや、須恵器坏蓋の模倣形態も存在する。高坏は坏身接合部分から脚上部の破片が出土している。鉢は短い口縁部が「く」字に外反する球胴のものが 1 点出土した。甕は小型のものと大型のものが出土している。大型のものは体部に最大径を有する長胴の形態が主体であるが、17 のように口縁部に最大径を有するものも存在する。小型のものも同様な傾向が認められる。小型甕 11 や大型甕 12 は東海系の甕の模倣と思われる。同様に 17 も搬入品の模倣形態と思われる。壺は 20、21 の 2 点が出土している。いずれも小型で内外面にミガキ調整が施される。甑は大型で、口縁部に最大径を有し、底部が開口する形態である。石器には台石、磨石、編物石の器種が認められる。石製品は剣形の石製模造品が 2 点出土した。

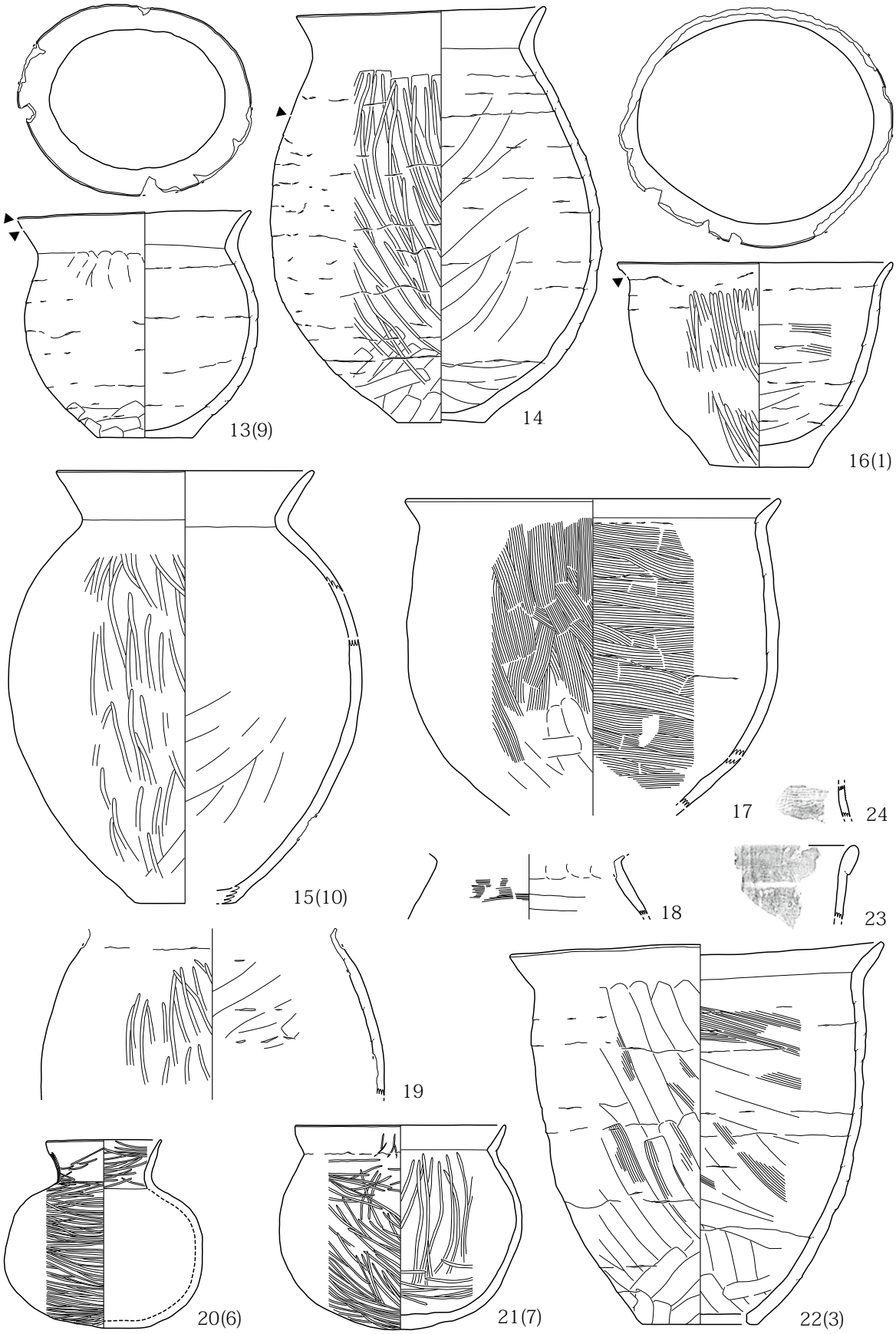
以上の出土遺物の特徴から本址は 5 世紀後葉の所産と思われる。



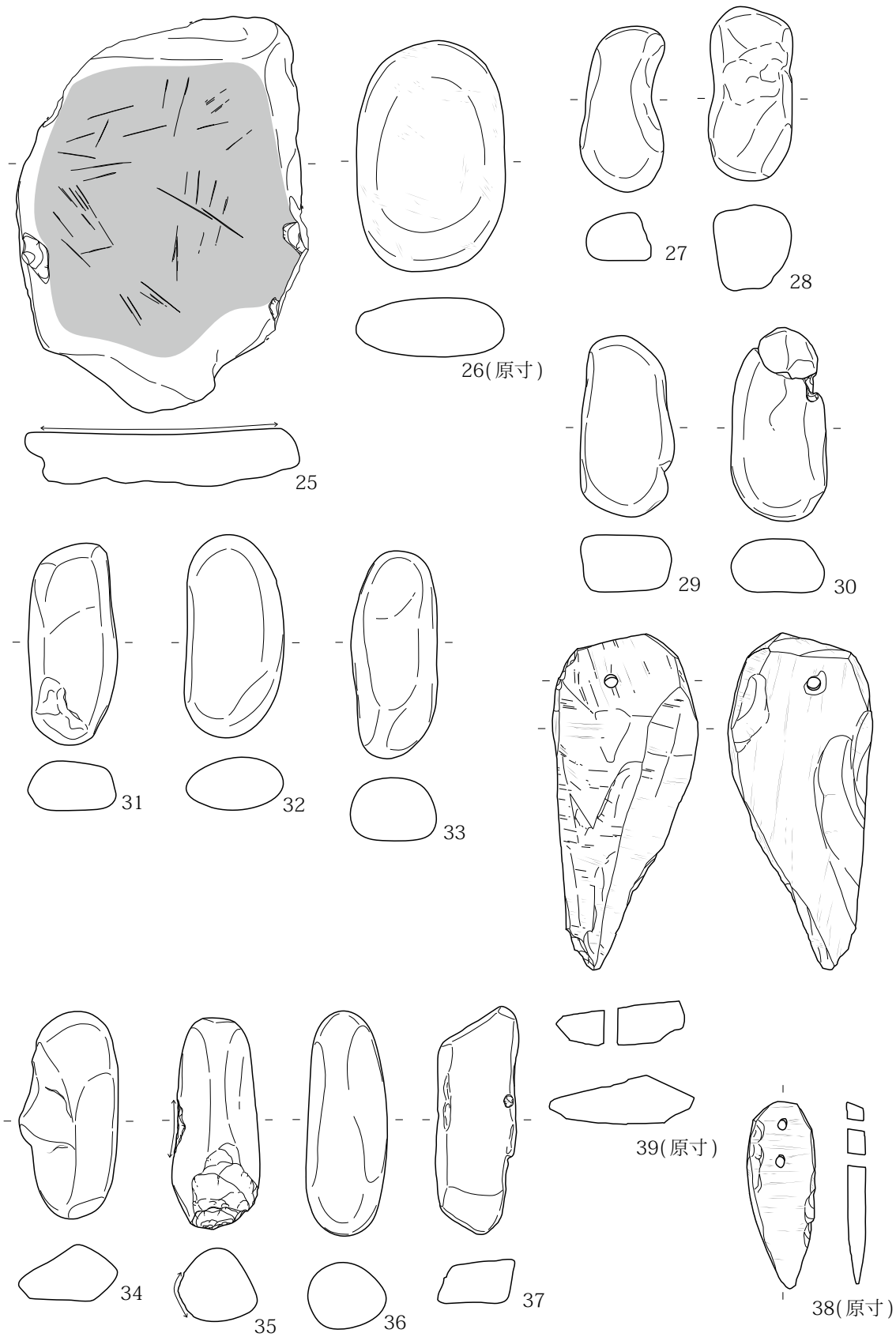
炭化材分布図



第 14 図　H8 号竪穴建物 (1)



第 15 図　H8 号竪穴建物 (2)



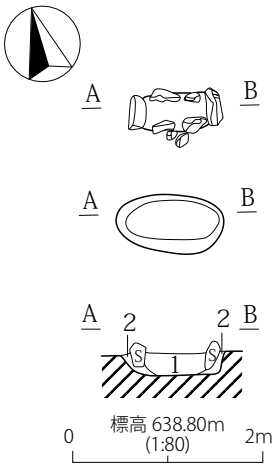
第 16 図　H8 号竪穴建物 (3)

第２節　石棺・土坑

Ｄ１号石棺（第 17 図）

調査区最北端、H2 号竪穴建物の北で検出された。他遺構との重複関係は認められない。木口方向に大きな礫を１ケ、板目方向には少し小振りの礫を２ケを配置し、長方形の平面形態を作り出している。堀方は平面楕円、断面は逆梯形である。N－72°－Wに長軸方位をとり、長軸長 1.14 m、短軸長 0.62 m、壁残高 0.25 m、面積 0.34 ㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格ともに不明であるが形態から石棺とした。



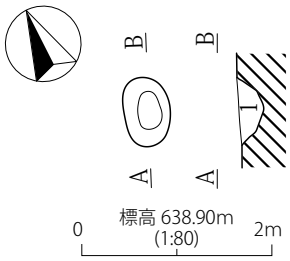
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 砂粒多含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR8/4石粒少含。

第 17 図　D1 号石棺

Ｄ２号土坑（第 18 図）

H5 号竪穴建物の西で検出された。古墳に切られる。平面楕円、断面鍋底の形態で、N－23°－E に長軸方位をとる。長軸長 0.74 m、短軸長 0.49 m、壁残高 0.26 m、面積 0.08㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり所産期は不明であるが、古墳以前の構築である。



1. 黒褐色土層　(10YR2/2) 10YR8/6砂粒・5/3シルト少含。

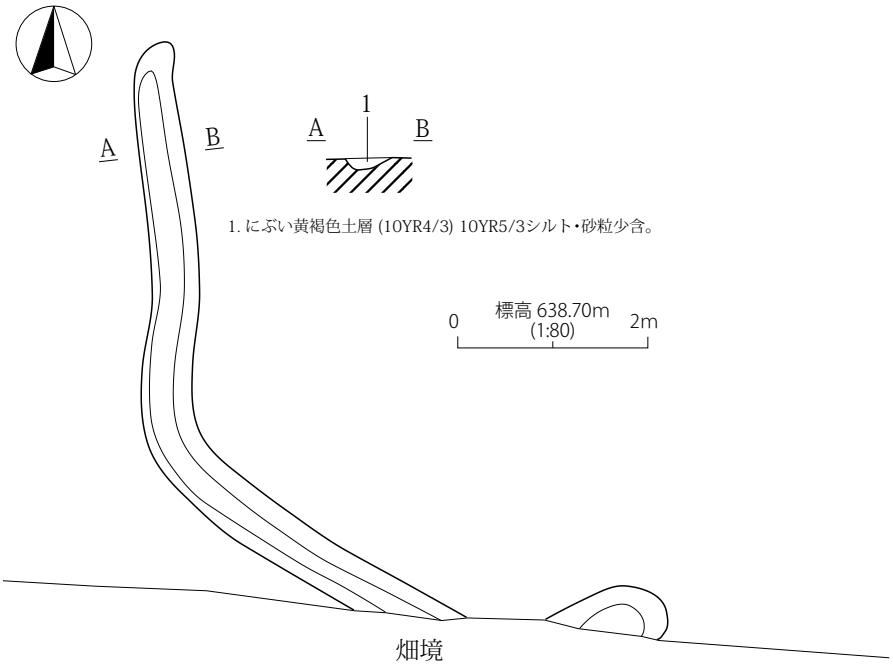
第 18 図　D2 号土坑

第３節　溝

Ｍ１号溝（第 19 図）

調査区中央で検出された。畑境により、南端の一部分が消失する。残存長 9.6 m、最大幅 0.51 m、最大深度 0.12 mの規模である。

出土遺物は皆無であり、所産期は不明である。



第 19 図　M1 号溝

Ｍ２号溝（第 20 図）

調査区中央で検出された。古墳に切られる。円形の平面形態で、溝の最大幅 0.66 m、最

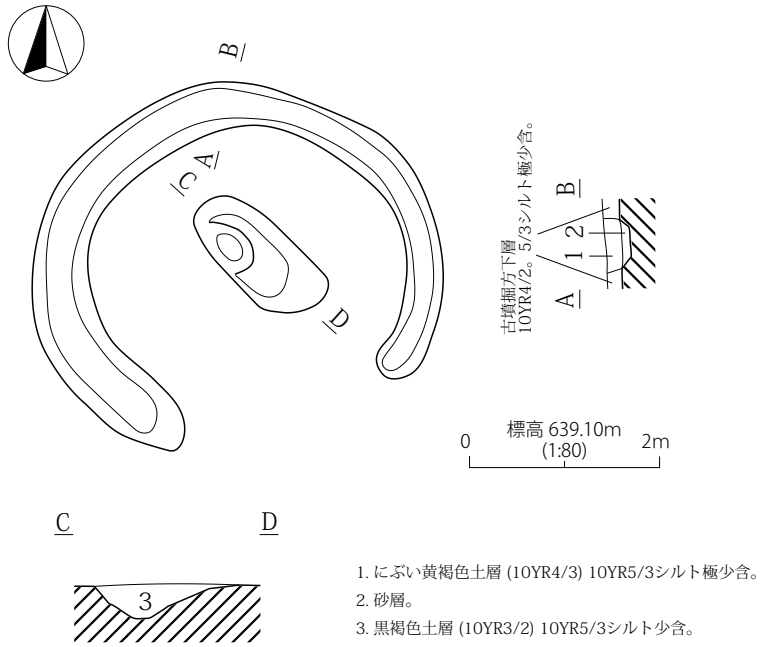
大深度 0.38 mの規模である。円形の中央部分には不整な長方形の土坑が存在する。

出土遺物が皆無なため判断しかねるが、円形周溝墓の可能性が高い。時期的には古墳以前の所産である。

M３号溝（第 21 図）

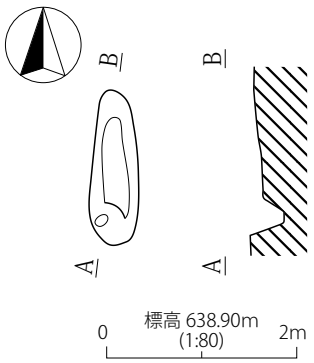
調査区北端中央で検出された。古墳に切られる。南北方向に延びる。残存長 1.64 m、最大幅 0.52 m、最大深度 0.5 mの規模である。

出土遺物が皆無なため判断しかねるが、方形周溝墓の可能性が高い。時期的には古墳以前の所産である。



1. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR5/3シルト極少含。
2. 砂層。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/3シルト少含。

第 20 図　M2 号溝



第 21 図　M3 号溝

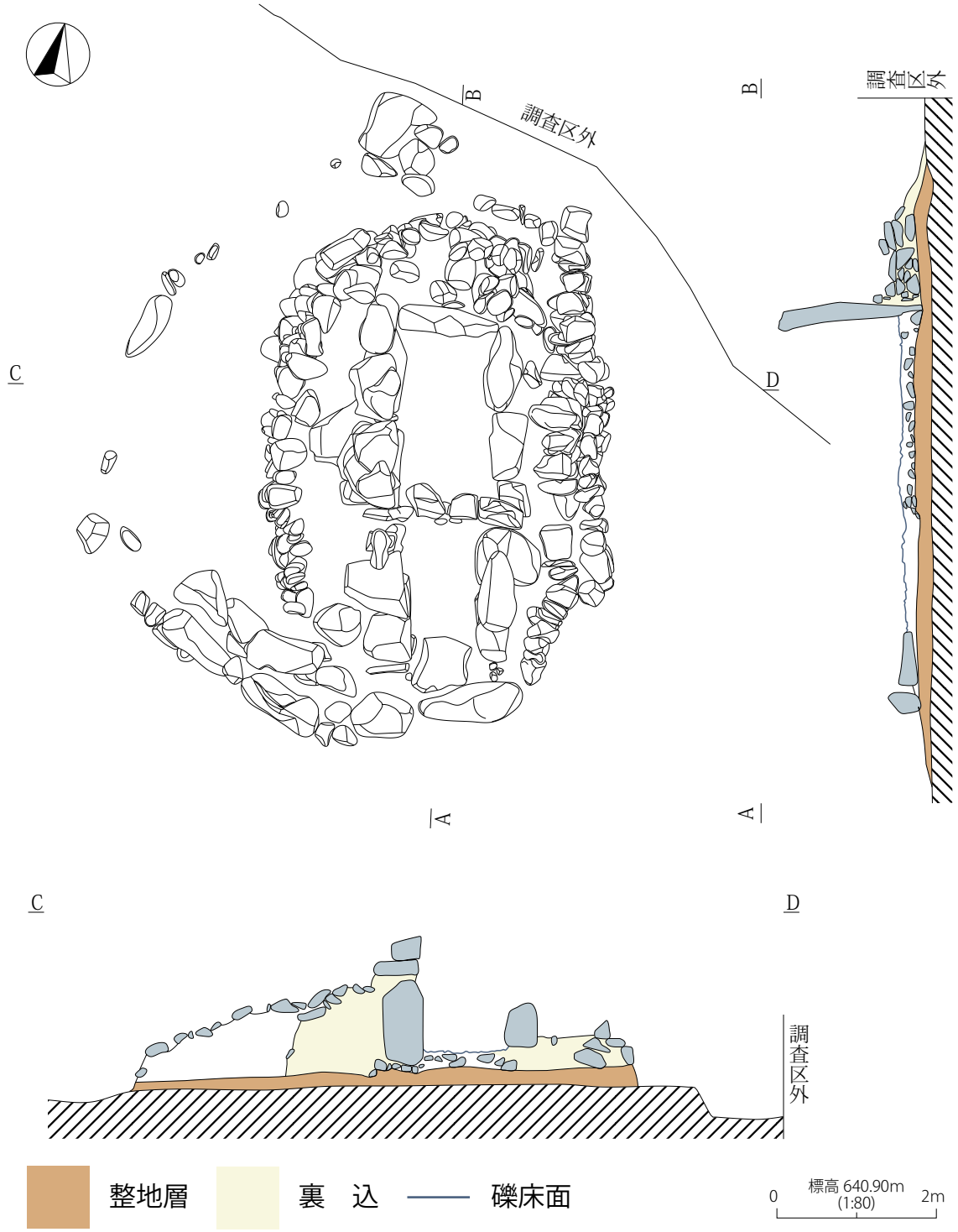
第４節　古墳（第 19 図）

立地　調査区北端中央で検出された。湯川の段丘端に立地している。未周知の古墳であり、所謂「ヤックラ」状態となっており、地主の方も地元の方々も古墳と認識していなかった。羨門の石が倒され、天井石が消失していることもあり、試掘調査においても古墳とは断定できかねる状態であったが、僅かに顔を出していた奥壁の頂部と思われる石の存在により古墳と想定し、調査を開始した。

方法と残存状況　石室奥壁と想定した石の頂部から現状の塚状の高まりを南北方向に二分割する基準線と、この線の中心で直行する東西方向の基準線を設定し、４分割した。４区画の北東部分を基準に反時計回りにⅠ～Ⅳ区とし、Ⅰ、Ⅲ区の残存面までを掘り下げた。葺石状に堆積した礫はその下にビニールなどの農業資材や家庭ゴミが埋められておりこれらを取り除くと、墳丘の封土はほぼ残存しておらず、東側壁の玄室部分も１段目しか残存していなかった。石室根石は本来の根石の外側に「ヤックラ」の石が崩れないようにするためか、低い石垣が新たに積まれていた。外護列石は、古墳築造前から存在していたらしい北端の大きな石から羨道西先端部分までがとびとびに残っていた。特にⅢ区部分南半分は状態が良かった。羨門の石は２つともに倒されていた。

墳丘の規模と形状　僅かに残された外護列石から墳丘は円墳であることが判明した。規模的には墳丘の残存径が 9.18 × 8.77 m、残存高 2.08 mで、周溝は認められなかった。

墳丘盛土　古墳は H5 号竪穴建物の真上に整地面を造成し構築されている。石室根石と外護列石間の封土は残存していないため盛土方法は分からない。また、石室根石と石室壁面の石との間には裏込石が充填されていた。葺石は残存しない。



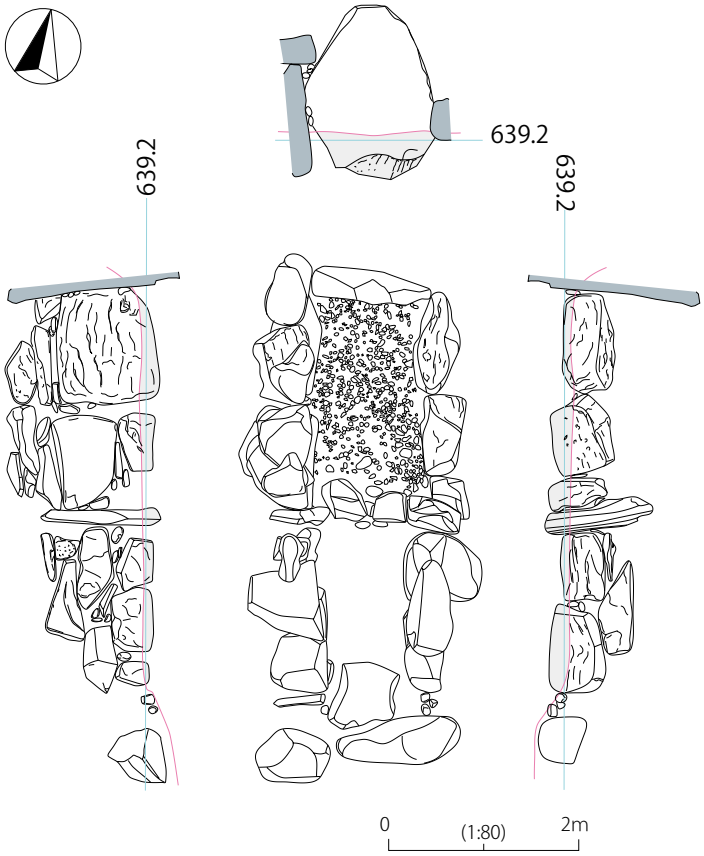
第 22 図　畳畑古墳平面図

畳畑古墳石室展開写真

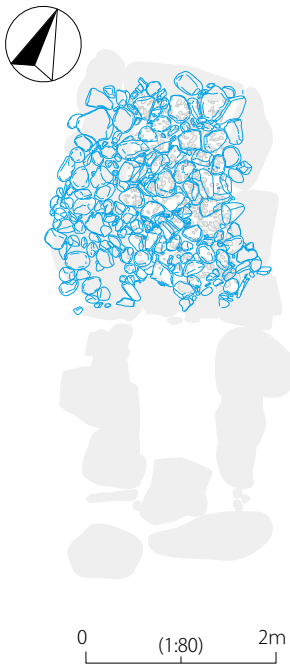
石室の規模と形状　石室は南南西方向に向かい開口する横穴式である。長さは羨道 2.15 ～ 2.2 m、玄門 0.44 m、玄室 1.84 ～ 1.85 m、幅は羨道 0.72 ～ 0.73 m、玄門 0.8 m、玄室 0.95 ～ 0.97 m、残存高は玄室 1.52 mである。奥壁は 1 枚石で、基部に加工痕が認められる。玄室側壁は 3 ～ 4 段積み、羨道は 3 段積みを基本としたようである。玄門間の床には框石が 2 個埋設され、倒された羨門間の床面にも大きな平石が埋設されていた。玄室高は奥壁残存高と同一である。羨道高は玄門高と同一の 0.87 ～ 1.072 mである。

石室の構築　石室は整地面に、玄室根石を敷、奥壁を立て、玄室側壁の 1 断面の石を置き、玄門の石を立て、框石を埋設する。その後羨道部側壁の 1 段目を置き、羨門の石と框石で長さ方向に固定し、外護列石との間を土で固定しながら石室根石を 1 段づつ積みながら側壁間を裏込石で充填固定している。この工程を繰り返し、側壁の高さが目的に達した後天井石を載せているものと思われる。葺石や石室内床面がどの工程で積まれ、敷かれるのかは調査からは判断しかねた。玄室床は根石上に粘土と小礫で床が構築される。羨道部の床は根石がなく礫床も構築されない。石室を構成する石には統一された大きさ、種類などの規格は認められない。積み方も統一されておらず面の中で、平坦で、面積が広く、長方形に近い面を壁面に用いている。石室は南南東に向け開口している。

石室内堆積物　石室内には天井石を取り去った際に落ち込んだ礫・土がまず堆積した。その後畑の耕作に邪魔な葺石などの礫が放り込まれ積み上げられたようである。東側壁は最下部 1 段を残し抜き取られているが、天井石と同時に破壊されたか、後日なのかは分からない。人力が及ぶ部分の石は捨てられ、土は畑に均されて行ったようである。その後側壁が抜き取られた東側に積み上げられた礫が崩落しやすくなったのを防ぐために、畑境の意味も兼ね、石室根石の外側に石垣が積まれたものと思われる。



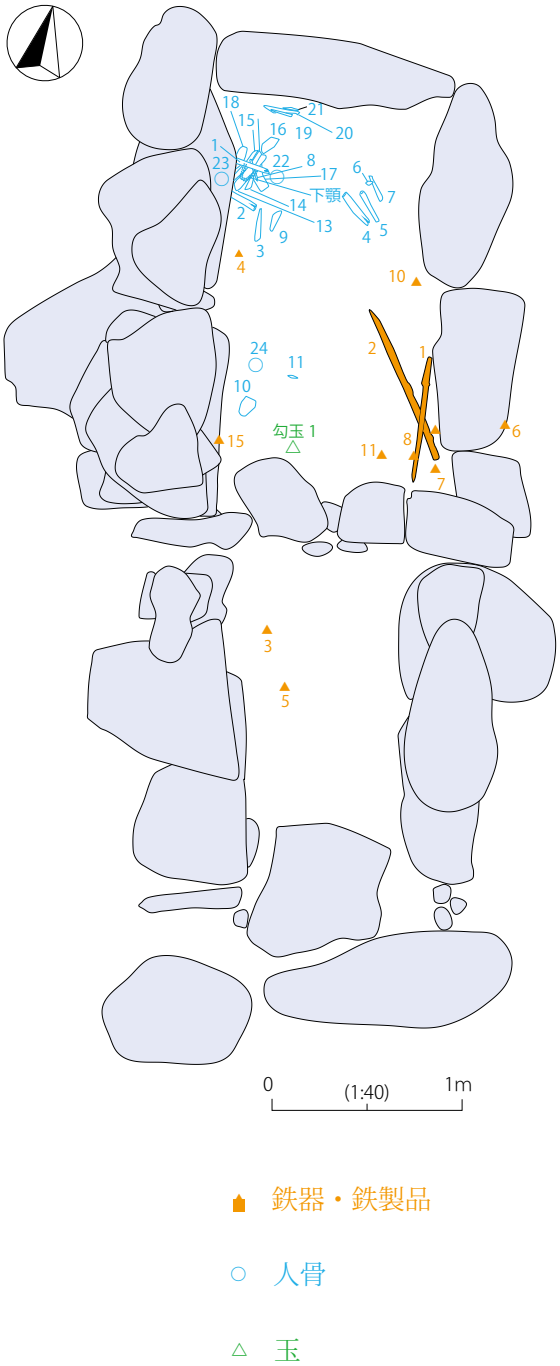
第 23 図　畳畑古墳石室展開図



第 24 図　石室根石平面図

石室の閉塞　本古墳には残されていないが玄門と、これに架かる楣石、床の框石が構成する羨道部側の面は羨道部分よりも四方が狭くなる。この張り出した部分を利用した木製扉の存在を示唆するように玄室側玄門傍から閂金具が２ケ出土した例が佐久市一本松古墳群３号墳で認められている。この時期の佐久地方の古墳は、玄室を木製の扉で閉塞する形態のものが多いのではないかと思う。一方、羨道部分は石により羨門部分で閉塞されていたものと思われる。

遺物出土状況　玄室及び羨道部分については礫床直上から構築面までの土をふるった。羨道部分からの出土は少なく、大半の遺物は玄室内から出土している。鉄器や人骨は、ほとんどが礫床面から出土したが、耳環やガラス小玉は玄室根石の間からも発見されている。人骨は奥壁北西隅近くに集積された状態を呈しているが、下顎の存在等から当初は北向きに安置されたものと思われる。直刀２振りを含む鉄器は東側壁の南半部分に集中しており、遺体左側に置かれたようである。下顎以外の頭骨は存在しなかったが、下顎以外の歯が少なからず出土していることから考えて、天井石や東側壁の抜き取りに際し、礫や土砂共に石室外に廃棄されてしまったものと思われる。なお、本址はH5 号竪穴建物の真上に構築されている。H5 号竪穴建物は６世紀中葉の年代が想定されることから、本址は以降に構築されたことが分かる。

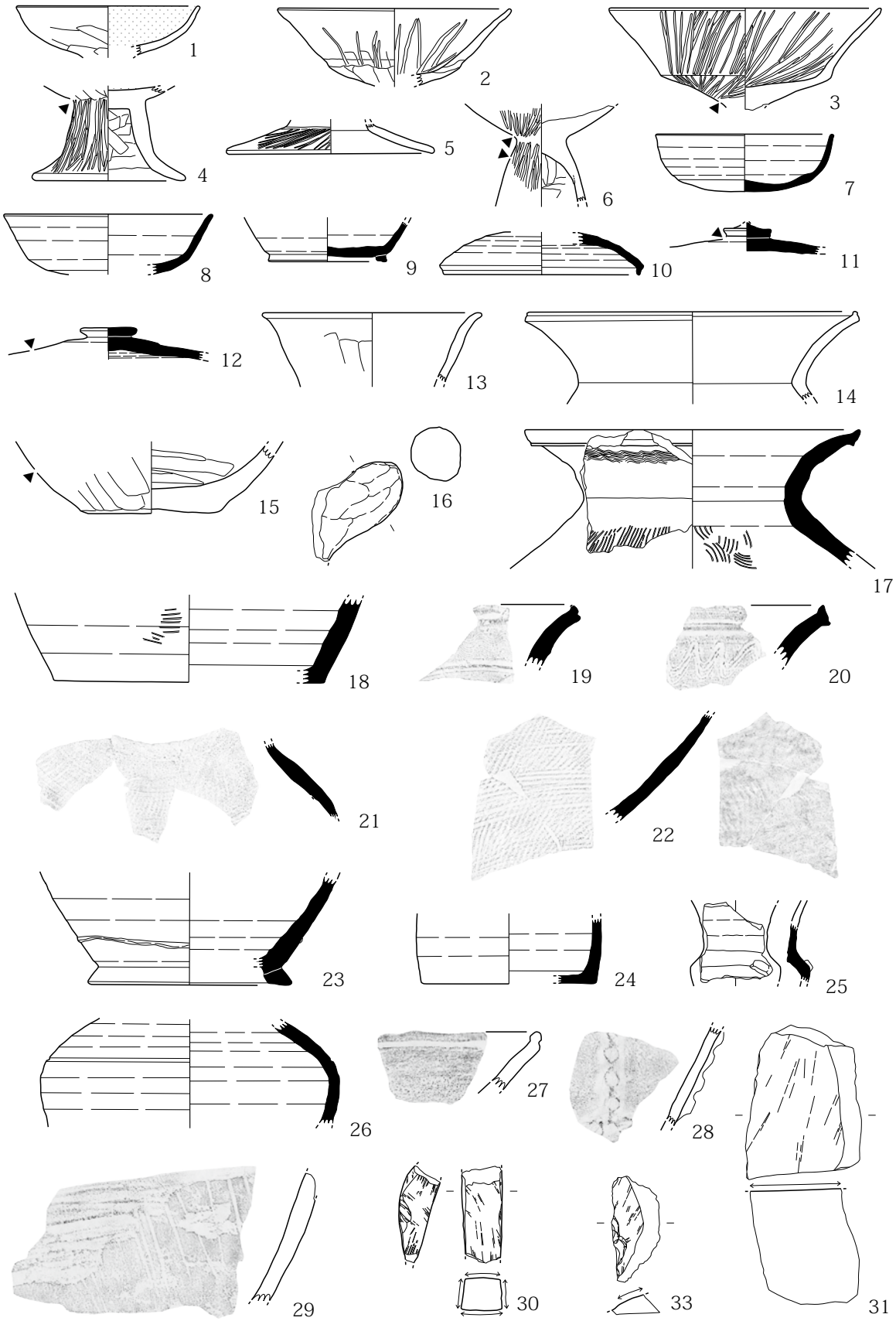


第 25 図　石室内出土遺物分布図

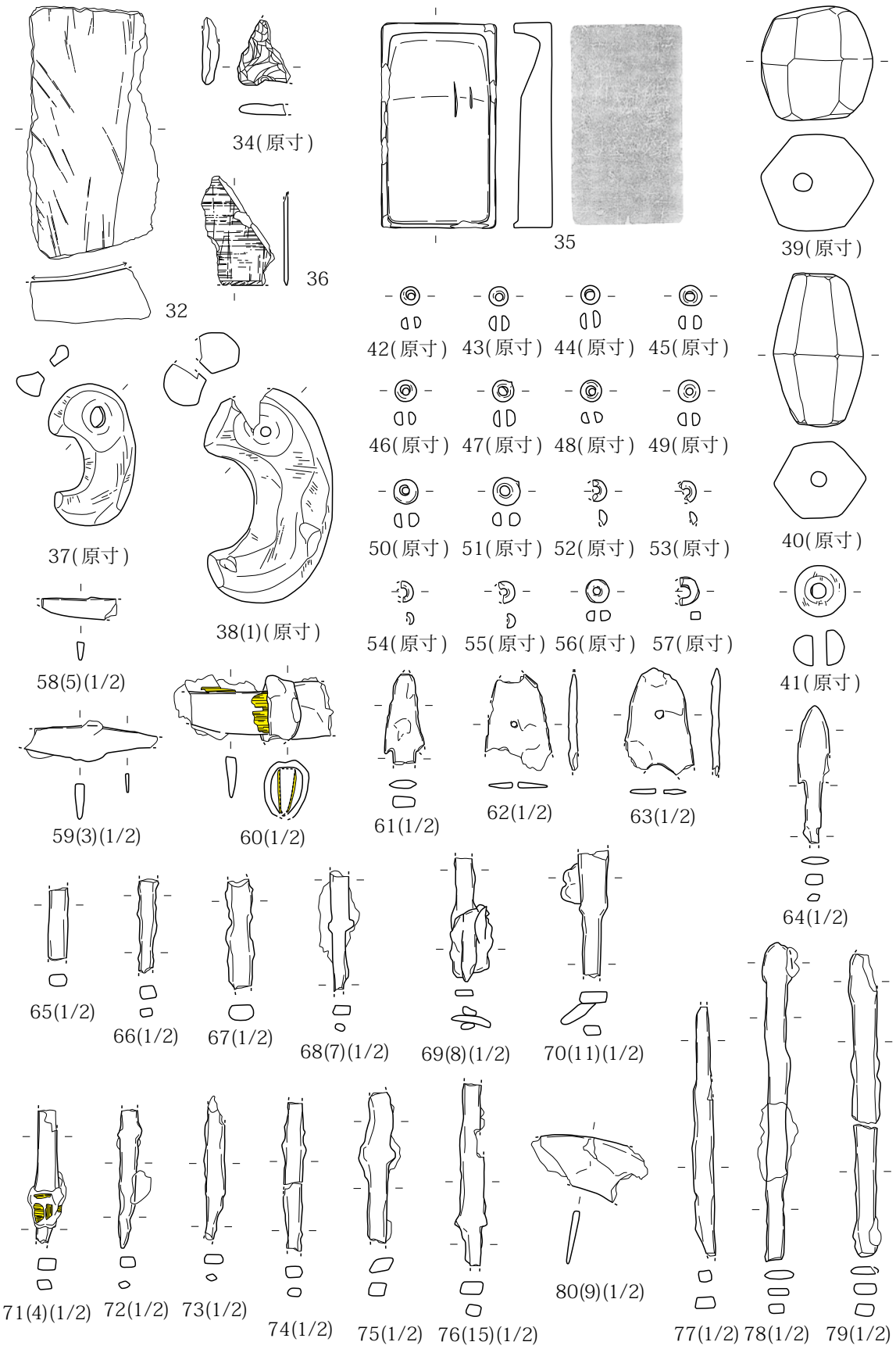
出土遺物（第 26 ～ 29 図）

①土器　土器は縄文土器、土師器、須恵器が出土している。縄文土器は後期堀之内式で、当然ながら混入品であるが、付近の概期遺跡の存在を示唆する。土師器高坏２・３・５・６、甑 16 は本址下層に存在する H5 号竪穴建物と同年代のものであり、混入品である。これ以外の高坏１・４、鉢 13、甕 14・15 は本址に伴うものであろう。須恵器は全て本址以降の年代のものである。器種的には坏（7・8）、有台坏（9）、坏蓋（10 ～ 12）、甕（17 ～ 22）、壺（23 ～ 26）が認められる。坏や壺 25 などが築造時のものと思われる。

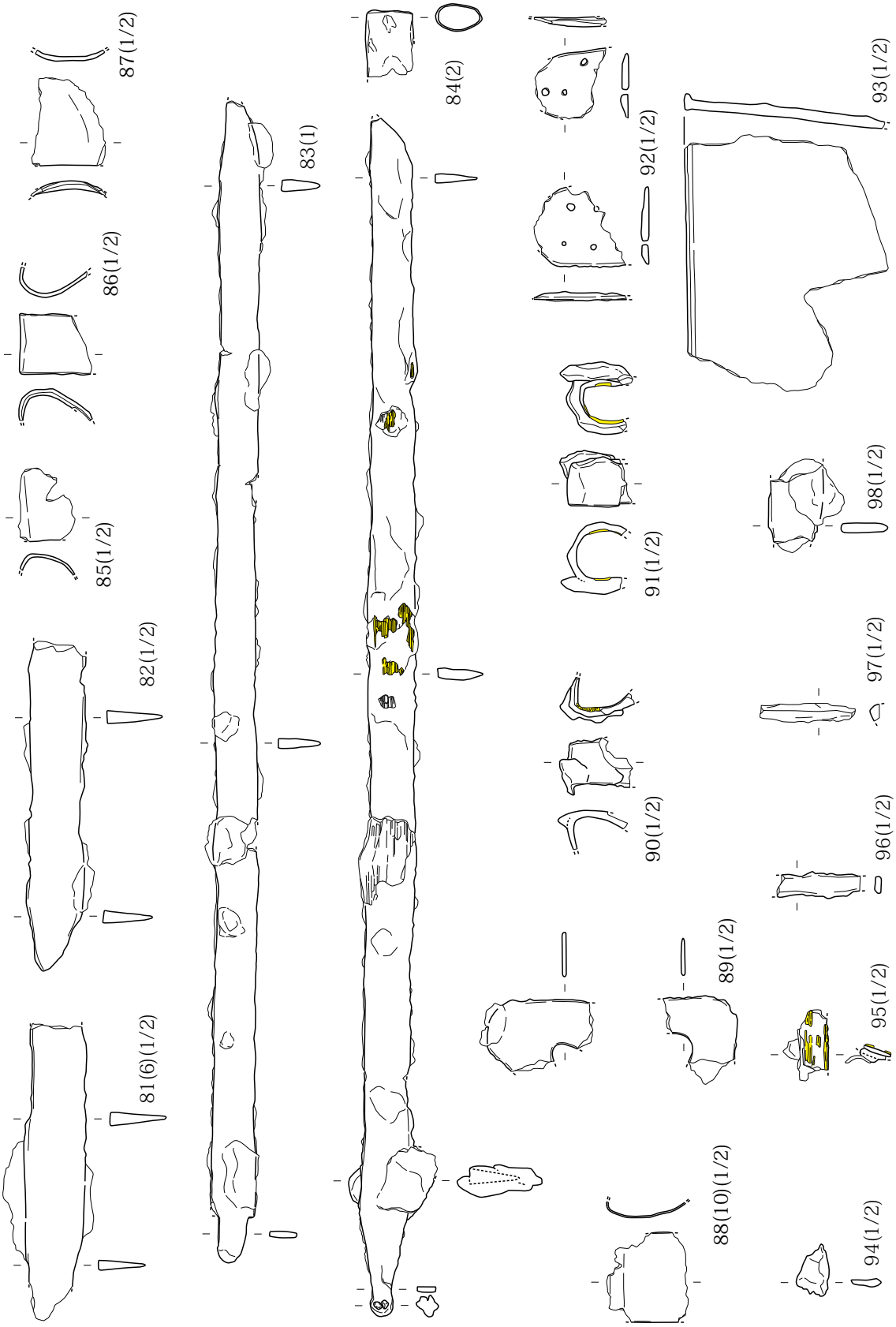
②石器・石製品　主体となるのは玉類であるが、墳丘やカクランから砥石（30）、台石（31・32）、磨石（33）、石鏃（34）、硯（35）、不明（36）なども出土している。勾玉は２点出土した。31 は頭部が欠損していたが、破片が接合した。２点共に孔の周囲がロート状に窪む。石材は深緑



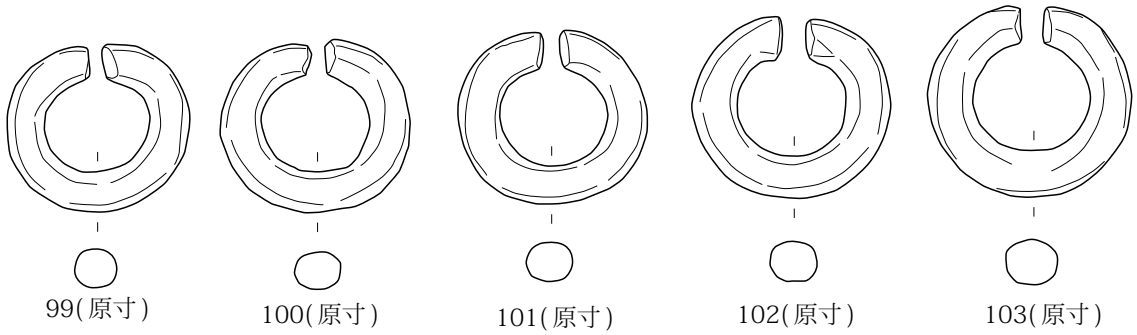
第 26 図　古墳出土遺物 (1)



第 27 図　古墳出土遺物 (2)



第 28 図　古墳出土遺物 (3)



第 29 図　古墳出土遺物 (4)

色の蛇紋岩と思われる。切子玉（39・40）は水晶製である。形態的に 39 はかなりズングリとしている。２点共に穿孔は片面から行われており、一端の孔径の方が大きい。丸玉（41）も蛇紋岩製と思われる。勾玉同様に孔周囲がロート状に窪む。その他ガラス小玉と同規格の滑石性の臼玉が２点（56・57）出土した。

③ガラス小玉（42 ～ 55）　極めて小型（径３～ 4.5 ミリ）であり、土をふるい検出された。欠損したものも多く、脆弱である。色は全て青である。

④鉄･鉄製品　器種的には直刀（81 ～ 84）､刀装具等（84･89 ～ 91･93）､刀子（58 ～ 60）､鏃（61 ～ 79）､小札（92）､鎌？（80）､不明（94 ～ 98）､鍋（93）がある。鍋は混入品である。直刀（84）は鞘尻金具が付いたまま出土した。銅製の刀装具は出土していないことから、直刀は鉄装であったものと考えられる。刀子（60）には口金具と柄に木質が残存していた。鏃は長頸で､鏃身が三角形、造込は両丸のものが多いようであるが、関の形態は棘、台形、両関が認められる。また２点（62・63）の出土であるが無茎鏃も出土している。小札（92）は綴孔２列ものであり、縅孔は第二まで認められる。形態、規格的には７世紀代のものとして捉えられるものであろう。鎌？（80）は破片であるため器種を断定できかねる。

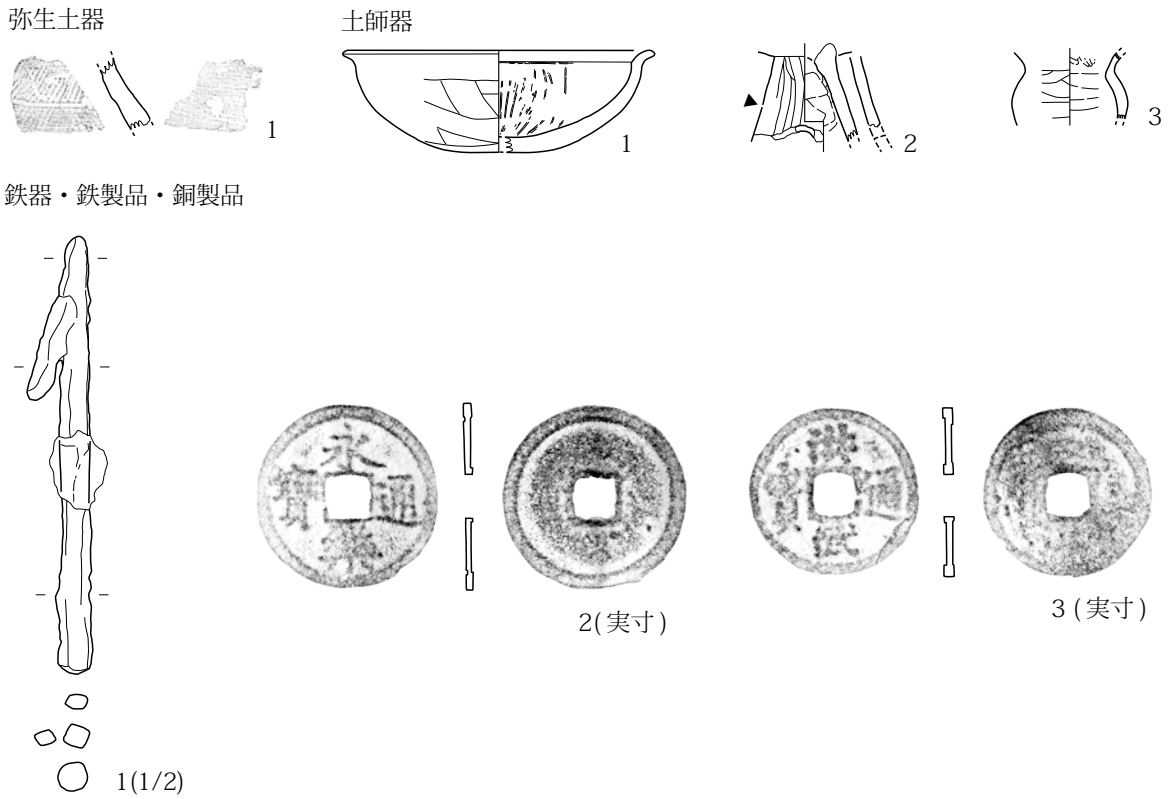
⑤銅製品　耳環（99 ～ 103）が５点出土している。全て銅芯金張である。

以上の出土遺物から本址の築造年代は古墳時代後期７世紀後葉が想定される。須恵器には明らかに８世紀前半のものが存在することから、奈良時代前半に追葬が行われた可能性がある。

第５節　遺構外出土遺物 (第 30 図)

トレンチ及び検出時に出土し、遺構内出土遺物との接合関係が認められない遺物を一括した。弥生土器１は壺の頸部片である。ヘラ描の平行沈線間に斜走文を充填している。土師器１は半球状の体部から口縁部が短く外反する坏で、内面には暗文状のミガキが施される。２は脚に４ケの円形透かしが穿たれる高坏の脚部片、３は壺型のミニチュア土器である。１は器種不明の鉄器･鉄製品、２・３は銅銭で中国から輸入されたものである。２は永楽通宝であり、初鋳は 1411 年であるが日本では室町時代から江戸時代初期まで流通したとされる。３は洪武通宝で 1368 ～ 1398 年に鋳造され、日本には室町時代末期に大量に輸入され、国内の大隅国でも模鋳されたものである。

当遺跡は段丘端部に向かい遺跡までの堆積層が厚くなっている。また地形傾斜も段丘端部に向かい、今回の調査地点の南北方向の中央部で一度きつくなり、再度平坦面を形成している。そのため地表面の散布遺物や遺構外から出土する遺物は極めて少ない。



第 30 図　遺構外出土遺物

第Ⅴ章　まとめ

畳畑遺跡の集落は、古墳時代中期５世紀の後葉から後期６世紀代に営まれたことが、出土した土器群から想定された。５世紀後葉の竪穴建物は湯川段丘端部寄りの調査区南側の一段低い場所に構築されており、所謂「焼失家屋」である。６世紀代の竪穴建物は一段高い段丘面に移動し、少なくとも２時期の変遷が伺える。何らかの理由により一度消失した集落が再建されている可能性が類推される。再建された集落もＨ５号竪穴建物の埋没後の７世紀後半に古墳が造営されていることから、長くとも７世紀前半には消滅したものと考えられる。この集落の存立理由としては、Ｈ１号竪穴建物に認められる製鉄が有力な要因として考えられる。遺跡の南には湯川と千曲川が並走しており、その対岸の丘陵部には石附古窯址群が存在する。石附古窯址群は佐久地方最古の須恵器窯址の性格とは別に、製炭窯の性格も持つ。ここで生産された炭が製鉄と密接な関係にあることは言うまでもなく、隣接して「小金平」地名も残る。古代、この地域一帯に製鉄を営む集団が存在したものと考えられるのである。おそらくは豊富な砂鉄が存在するのであろう。もう一つ今回の調査の成果として未周知であった畳畑古墳の発見が挙げられる。天井石や東側壁上部の石を含む墳丘はほぼ消失しており、羨門も倒されていたが、埋葬面以下は残存していた。無論、盗掘等により埋葬者や副葬品については完全な状態ではなかったが、直刀２振を筆頭に相応の遺物が出土した。装飾品は勾玉、切子玉、丸玉、ガラス小玉などの玉類と銅芯金張の耳環。武具は複数の直刀と、鉄鏃の存在から弓矢、そして小札の存在から鎧の副葬が類推された。一方で、馬具は全く認められなかった。出土土

器からは奈良時代に追葬が行われた可能性が認められるものの、出土人骨に頭部は一つしか存在しなかった。この古墳に最初に埋葬された人物、言い換えるならば、古墳築造の契機となった人物は、副葬品からは武人と考えられる。（人骨同定からは少なくとも５体の埋葬が推測されている）

以上の古墳時代中期後葉から後期にかけての時代とは別に、弥生時代のものと考えられる円形の溝が出土している、時期不明の石棺も含め弥生時代後期には墓域であった可能性が考えられる。また、縄文時代後期堀之内式土器の出土は、付近に概期の遺跡が存在することを示唆している。更に湯川対岸の岩尾城の存在は、関連する中世期の遺構の存在も併せて示唆しており、今回の調査でも銅銭が出土している。遺跡周辺は水田地帯であり、遺跡の存在が分かりずらい地域ではあるが佐久地域の歴史を解明するうえで極めて重要な地域であることが再確認された調査であった。

尚、発見され調査により消滅した古墳は「畳畑古墳」とした。

引用・参考文献

1995 年　佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 42 集　「寄山」寄山古墳　宇賀神誠司

1996 年　「佐久平における古墳時代の土器編年試案」　長野県考古学会誌 79　冨沢一明

2000 年　佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 78 集　「蛇塚遺跡」「蛇塚古墳」　冨沢一明

2005 年　佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 126 集　「聖原」－第５分冊－　小林眞寿

2011 年　「日本古代の武器・武具と軍事」　吉川弘文館　津野　仁

2013 年　「シナノにおける古墳時代社会の発展から律令期への展望」　西山克己

2013 年　文化庁文化財部記念物課　「発掘調査のてびき」－各種遺跡調査編－

2023 年　「牛田古墳群」　群馬県藤岡市

第Ⅵ章　畳畑遺跡の出土人骨

パリノ・サーヴェイ株式会社

＜目次＞

はじめに　p. 1

1. 試料　p. 1

2. 分析方法　p. 1

3. 結果および考察　p. 1

4. まとめ　p. 8

引用文献　p. 8

＜図表・図版一覧＞

表 1.　骨同定結果

表 2.　歯式

表 3.　歯牙計測値

図 1.　頭蓋骨出土状況

図 2.　四肢骨出土状況

図版 1　出土骨 (1)

図版 2　出土骨 (2)

はじめに

畳畑遺跡 (長野県佐久市鳴瀬に所在) は、千曲川と湯川が最も近接する湯川右岸の段丘上先端部に位置する。2019 年の豪雨災害により被災した本願橋の橋梁架け替え工事に伴って行われた発掘調査では、古墳 1 基、竪穴建物 8 軒、石棺 1 基、溝 2 条などの遺構が確認されている (佐久市教育委員会 ,2022)。今回、古墳や調査区内から検出された骨について部位を明らかにし、被葬者に関する情報を得ることにした。

1. 試料

試料は、玄室および石室から採取された 25 点 (B1 ～ 25)、石室床面、礫床床面、玄室礫床下層、玄室内床直上、玄室礫床面、H1 の I 区、H5 の I 区などから出土した骨である。試料は、いずれもクリーニングされた状態にある。なお、試料の詳細については、結果とともに表示する。

2. 分析方法

試料を肉眼で観察し、形態的特徴から種、部位を特定する。また、歯牙に関しては、藤田 (1949) に準じてデジタルノギスで計測する。

3. 結果および考察

同定結果を表 1 に、歯式を表 2、歯牙計測値を表 3 に示す。また、出土部位に関して模式図として図 1・2 に示す。年齢については、主に Broca、および Brothwell(1981) の加齢による歯の磨り減り具合を参考として検討した。性別は、歯冠幅・厚の計測値を權田 (1959)、岡崎 (2005) と比較して検討した。なお、年齢に関しては、乳児が 0 ～ 1 歳、幼児が 1 ～ 5 歳、小児が 6 ～ 15 歳、成人が 16 歳以上、成年が 16 ～ 20 歳、壮年が 20 ～ 39 歳、熟年が 40 ～ 59 歳、老年が 60 歳以上を示す。以下、試料ごとに示す。

＜玄室および石室出土骨＞

検出された骨は、頭蓋骨、大腿骨である。ヒトの可能性がある骨片 (表中でヒト？と表記) も、破片のため特定できないが、おそらくはヒトに由来すると考えてよいであろう。以下、試料ごとに記す。

・玄室 B1　ヒト左大腿骨である。比較的頑丈で、粗線が発達することから、成人男性の可能性がある。後述する B2 と同一個体に由来する可能性がある。

・玄室 B2　ヒト右大腿骨である。粗線が発達することから、男性の可能性がある。B1 と同一個体に由来する可能性がある。

・玄室 B3　ヒトの左大腿骨である。骨の形状からみて後述する B15 と同一個体の可能性がある。

・玄室 B4　ヒトの左大腿骨である。

・玄室 B5　ヒトの右大腿骨である。

・玄室 B6　ヒトの可能性がある四肢骨である。

・玄室 B7　ヒトの可能性がある四肢骨である。

・玄室 B8　ヒトの右大腿骨である。

・玄室 B9　ヒトの可能性がある部位不明破片である。

・玄室 B10　ヒトの左右側頭骨錐体部、ヒトの可能性がある部位不明破片である。

・玄室 B11　ヒトの左側頭骨錐体部である。

・石室 B13　両端が欠損するヒトの左大腿骨である。

・石室 B14　両端が欠損するヒトの右大腿骨である。

・石室 B15　両端が欠損するヒトの右大腿骨である。骨の形状からみて B3 と同一個体の可能性がある。

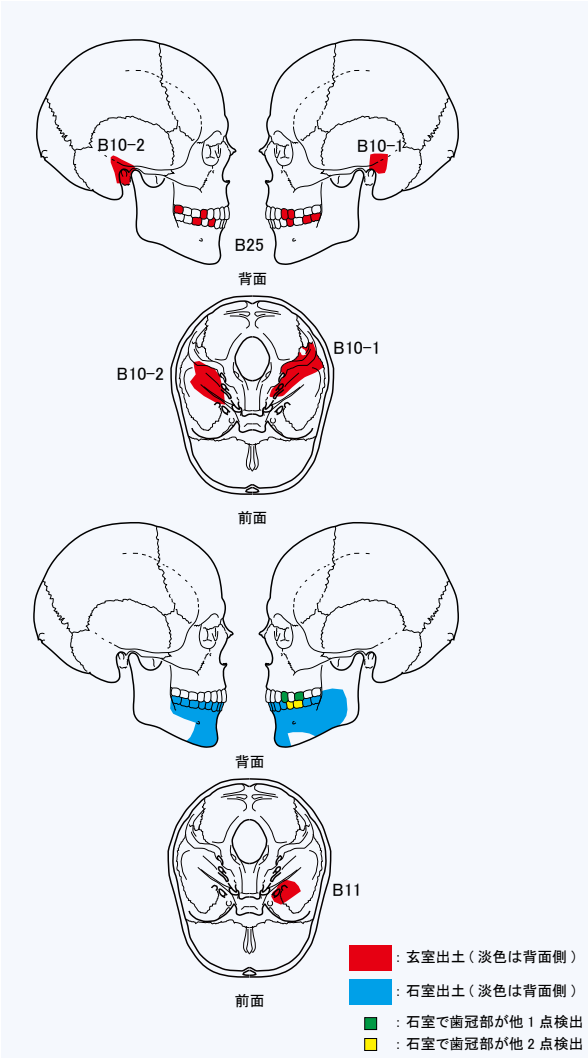


図 1.　頭蓋骨出土状況

表 1.　骨同定結果

遺構名	区・層	No.	種類	部位	左	右	状態等	数		備考	年齢	性別
玄室		B1	ヒト	大腿骨	左		破片	1	+	頑丈、B2 と同一個体？	成人？	男性？
玄室		B2	ヒト	大腿骨		右	破片	1	+	頑丈、B1 と同一個体？	成人？	男性？
玄室		B3	ヒト	大腿骨	左		破片	1	+	B15 と同一個体？	?	?
玄室		B4	ヒト	大腿骨	左		破片	1	+		?	?
玄室		B5	ヒト	大腿骨		右	破片	1	+		?	?
玄室		B6	ヒト？	四肢骨			破片	2	+		-	-
玄室		B7	ヒト？	四肢骨			破片	1	+		-	-
玄室		B8	ヒト	大腿骨		右	破片	1	+		?	?
玄室		B9	ヒト？	不明			破片	32	+		-	-
玄室		B10	ヒト	側頭骨	左		破片	1	+	B10-1	?	?
						右	破片	1		B10-2	?	?
			ヒト？	不明			破片	3	+		-	
玄室		B11	ヒト	側頭骨	左		錐体部	1	+		?	?
石室		B13	ヒト	大腿骨	左		破片	1	+		?	?
石室		B14	ヒト	大腿骨		右	破片	1	+		?	?
石室		B15	ヒト	大腿骨		右	破片	1	+	B3 と同一個体？	?	?
石室		B16	ヒト？	不明			破片	3	+		-	-
石室		B17	ヒト？	不明			破片	33	+		-	-
石室		B18	ヒト	大腿骨	左		破片	1	+		?	?
石室		B19	ヒト？	不明			破片	45	+		-	-
石室		B20	ヒト？	不明			破片	44	+		-	-
石室		B21	ヒト？	四肢骨			破片	1			-	-
				不明			破片	33	+		-	-
石室		B22	ヒト	下顎第 1 大臼歯	左		破片	1	+	Broca0	小児以下	男性？
石室		B23	ヒト	下顎第 1 大臼歯	左		破片	1	+	Broca1'、礫床床面と同一個体？	小児程度	?
石室		B24	ヒト	上顎第 1 大臼歯	左		破片	1	+	Broca1'	小児程度	?
石室		B25	ヒト	下顎骨	左	右	破片	1		M1-2:Broca2 M3:Broca0	壮年前半	男性？
				上顎第 1 小臼歯	左		破片	1		Broca1'	小児以上	男性？
				下顎第 2 小臼歯	左		破片	1		Broca1	小児以上	男性？
				下顎第 2 小臼歯	左		破片	1		Broca1'	小児以上	男性？
			ヒト？	不明			破片	23	+		-	-
石室床面			ヒト？	後頭骨？			破片	1			-	-
				不明			破片	27	+		-	-
礫床床面			ヒト	上顎第 2 小臼歯		右	破片	1		Broca1'	小児以上	-
				上顎第 1 大臼歯	左		破片	1		Broca1'	小児程度	男性？
				下顎第 1 大臼歯		右	破片	1		Broca1'、B23 と同一個体？	小児程度	女性？
				下顎第 2 大臼歯	左		破片	1		Broca1'	小児程度	女性？
				大臼歯			歯冠部片	1			-	-
			ヒト？	脳頭蓋			破片	1			-	-
				不明			破片	3			-	-
			植物遺体				破片	1			-	-
玄室礫床	下層		ヒト	上顎第 2 小臼歯	左		破片	1		Broca1'	小児以上	男性？
				上顎第 3 大臼歯		右	破片	1		Broca0(未出)	成年以下	男性？
				下顎第 1 小臼歯		右	破片	1		Broca1'	小児以上	男性？
				下顎第 2 小臼歯	左		破片	1		Broca1'	小児以上	男性？
				下顎第 3 大臼歯	左		破片	1		Broca0(未出)	成年以下	男性？
			ヒト？	歯			歯冠部片	2			-	-
				不明			破片	3			-	-
			植物遺体				破片	4			-	-
			錆				破片	1			-	-
玄室内	床直上		ヒト？	不明			破片	7			-	-
玄室	礫床面		ヒト？	歯			歯冠部片	2			-	-
				不明			破片	25			-	-
玄室	礫床面		ヒト？	不明			破片	>200			-	-
			礫					3			-	-
			土塊					20			-	-
H1	I 区	骨？	哺乳類	不明			破片	4		焼骨	-	-
H1		骨	哺乳類	頭蓋骨？			破片	1		焼骨	-	-
H5	I 区		哺乳類	不明			破片	1		加工品	-	-

・石室 B16　ヒトの可能性がある部位不明破片である。

・石室 B17　ヒトの可能性がある部位不明破片である。

表 2.　歯式

			右								左							
玄室	遊離歯牙		M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
			8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		上顎	1			1									1	1		
		下顎			1		1								1		1	1
石室	下顎骨 B25		右								左							
			M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
			8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		上顎																
		下顎	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	遊離歯牙		右								左							
			M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
			8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		上顎												1		1		
		下顎													2	2		

表 3.　歯牙計測値

遊離歯牙			試料	左		試料	右	
				歯冠幅	歯冠厚		歯冠幅	歯冠厚
上顎	第 1 切歯	I1						
	第 2 切歯	I2						
	犬歯	C						
	第 1 小臼歯	P1	B25	7.68	9.92			
	第 2 小臼歯	P2	玄室礫床下層	7.71	10.53	礫床床面	-	-
	第 1 大臼歯	M1	礫床床面	10.73	12.63			
			B24	-	11.50			
	第 2 大臼歯	M2						
	第 3 大臼歯	M3				玄室礫床下層	10.23	10.03
下顎	第 1 切歯	I1						
	第 2 切歯	I2						
	犬歯	C						
	第 1 小臼歯	P1				玄室礫床下層	7.67	8.74
	第 2 小臼歯	P2	B25	7.74	8.72			
			B25	8.13	9.26			
			玄室礫床下層	7.91	9.29			
	第 1 大臼歯	M1	B22	12.38	12.34	礫床床面	11.01	10.45
			B23	-	10.68			
	第 2 大臼歯	M2	礫床床面	10.69	9.73			
	第 3 大臼歯	M3	玄室礫床下層	11.43	10.49			
下顎骨			試料	左		試料	右	
				歯冠幅	歯冠厚		歯冠幅	歯冠厚
下顎	第 1 切歯	I1	B25	5.32	6.14	B25	5.25	6.57
	第 2 切歯	I2		6.53	6.81		6.01	6.91
	犬歯	C		7.08	8.29		7.14	8.14
	第 1 小臼歯	P1		7.77	7.41		7.32	7.81
	第 2 小臼歯	P2		8.10	8.75		7.53	8.47
	第 1 大臼歯	M1		11.95	11.03		11.76	11.02
	第 2 大臼歯	M2		11.44	10.71		11.50	11.11
	第 3 大臼歯	M3		11.14	11.22		11.73	10.78

・石室 B18　ヒトの左大腿骨である。

・石室 B19　ヒトの可能性がある部位不明破片である。

・石室 B20　ヒトの可能性がある部位不明破片である。

・石室 B21　ヒトの可能性がある四肢骨、部位不明破片である。

・石室 B22　ヒトの左下顎第 1 大臼歯である。Broca0 で、小児以下と考えられる。サイズ的には男性的である。

・石室 B23　ヒトの左下顎第 1 大臼歯である。Broca1' で、小児程度と考えられる。壊れており、歯冠幅不明である。歯冠厚は、男性と女性の中間的サイズを示す。咬合面の形状は礫床床面の右下顎第 1 大臼歯と類似

しており、同一個体の可能性もある。

・石室 B24　ヒトの左上顎第 1 大臼歯である。Broca1' で、小児程度と考えられる。歯冠厚は、男性と女性の中間的サイズを示す。

・石室 B25　ヒトの左右下顎骨、左上顎第 1 大臼歯、左下顎第 2 小臼歯 2 点、ヒトの可能性がある部位不明破片である。左右下顎骨は、第 1・2 大臼歯が Broca2、第 3 大臼歯が Broca0 で、壮年前半の可能性がある。サイズ的には男性的である。左上顎第 1 小臼歯は、Broca1' で咬耗が認められることから、小児以上と考えられる。サイズ的には男性的である。左下顎第 2 小臼歯の内、1 点は Broca1、もう 1 点は Broca1' で、いずれも咬耗が認められることから小児以上と考えられる。2 点ともサイズ的には男性的である。

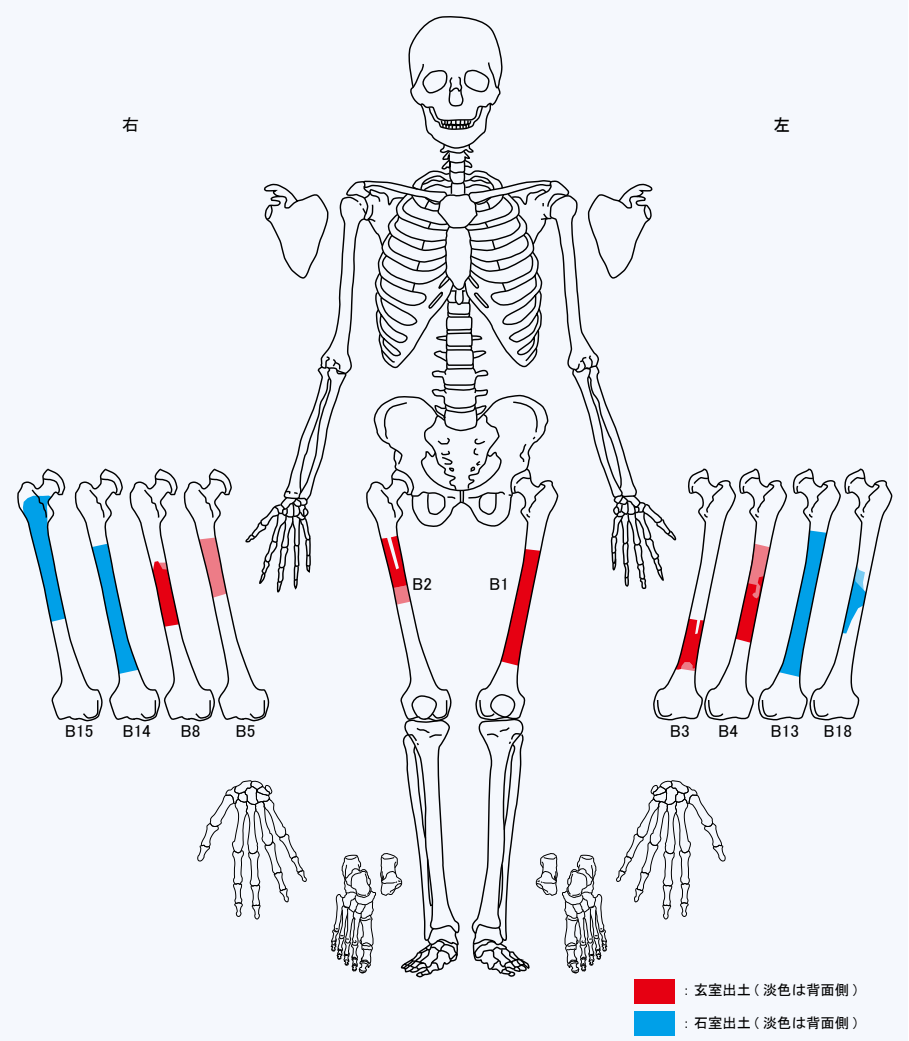


図 2.　四肢骨出土状況

・石室床面　ヒトの可能性があり、後頭骨の可能性がある破片と部位不明破片である。

・礫床床面　ヒトの右上顎第 2 小臼歯、左上顎第 1 大臼歯、右下顎第 1 大臼歯、左下顎第 2 大臼歯、ヒトの可能性がある脳頭蓋・部位不明破片が検出される。右上顎第 2 小臼歯は、Broca1' で小児以上と考えられる。歯冠幅・厚とも計測不可能である。左上顎第 1 大臼歯は、Broca1' で小児程度と考えられる。サイズ的には男性的である。右下顎第 1 大臼歯は、Broca1' で小児程度と考えられる。サイズ的には女性的である。前述した B23 と咬合面の形状が類似していることから同一個体の可能性もある。左下顎第 2 大臼歯は、Broca1' で小児程度と考えられる。サイズ的には女性的である。この他、植物遺体が検出される。

・玄室礫床下層　ヒトの左上顎第 2 小臼歯、右上顎第 3 大臼歯、右下顎第 1 小臼歯、左下顎第 2 小臼歯、左下顎第 3 大臼歯、ヒトの可能性がある歯・部位不明破片が検出される。

左上顎第 2 小臼歯は、Broca1' で小児以上と考えられる。サイズ的には男性的である。右上顎第 3 大臼歯は、未出歯牙の Broca0 で成年以下と考えられる。サイズ的には男性的である。右下顎第 1 小臼歯は、Broca1' で小児以上と考えられる。サイズ的には男性的である。左下顎第 2 小臼歯は、Broca1' で小児以上と考えられる。

サイズ的には男性的である。左下顎第３大臼歯は、未出歯牙の Broca0 で成年以下と考えられる。サイズ的には男性的である。この他、植物遺体、錆が検出される。

・玄室内床直上　ヒトの可能性がある部位不明破片である。

・玄室礫床面　２試料みられる。ヒトの可能性がある歯および部位不明破片である。この他、礫、土塊がみられる。

＜ H1 ＞

２試料みられる。哺乳類の部位不明破片４点、頭蓋骨の可能性がある破片１点がみられる。いずれも小さな破片で、白色を呈し、表面にひび割れが生じており、焼骨である。種類不明であるが、食料資源等として利用した後に焼却、廃棄した可能性がある。

＜ H5　Ⅰ区＞

哺乳類の部位不明破片である。長さ 57.97mm、幅 25.47mm、厚さ約 1.5 ～ 4.5mm を測り、若干反り返る。一面は緻密質のみ、反面は一部緻密質が残るが、削って海面質が露出する。また、方形の窪みが２条みられ、破損している場所の方形の窪みの痕跡が観察できる。なお、中央部に穴がみられるが、意図的な穿孔でなく、後代に破損したものと思われる。頭蓋骨や脛骨など比較的扁平な部位を利用して加工された骨角器である。

4. まとめ

石室・玄室から出土した骨は、左下顎第２小臼歯と大腿骨が重複する。左下顎第２小臼歯は、B25 で下顎骨の他に遊離歯牙で２点、玄室礫床下層で１点、計４点みられる。大腿骨は、左側が B1、B3、B4、B13、B18 の５点、右側が B2、B5、B8、B14、B15 の５点が検出される。これより、玄室・石室あわせて少なくとも５体が埋葬されているとみられる。

大腿骨の B1(左) と B2(右) は両方とも粗線が発達することから同一個体に由来する可能性があり、男性の可能性がある。また、B3(左) と B15(右) は形状が類似することから同一個体の可能性がある。

B22 の左下顎第１大臼歯は、萌出しているが、Broca0 程度であり、咬耗がほとんどみられないことから、小児以下と判断され、歯冠サイズをみると男性の可能性がある。

B23 の左下顎第１大臼歯、礫床床面の右下顎第１大臼歯・左下顎第２大臼歯は、歯冠幅・歯冠厚が女性的なサイズであり、咬合面の形状も類似していることから同一個体に由来する可能性もあり、小児程度の個体と考えられる。

B25 の下顎骨は、第３大臼歯が萌出し、第１･２大臼歯が Broca2 程度、第３大臼歯が Broca0 であること、歯冠幅･歯冠厚を考慮すると、壮年前半の男性の可能性がある。

玄室礫床下層の左右上顎第３大臼歯は、Broca0 で萌出していない歯牙であることから、成年以下と判断され、男性の可能性がある。

以上、少なくとも５体が埋葬されていたと考えられる。また、年齢性別に関しては、壮年男性が１体、成年以下男性が１体、小児以下男性が１体、小児程度女性が１体の可能性がある。

引用文献

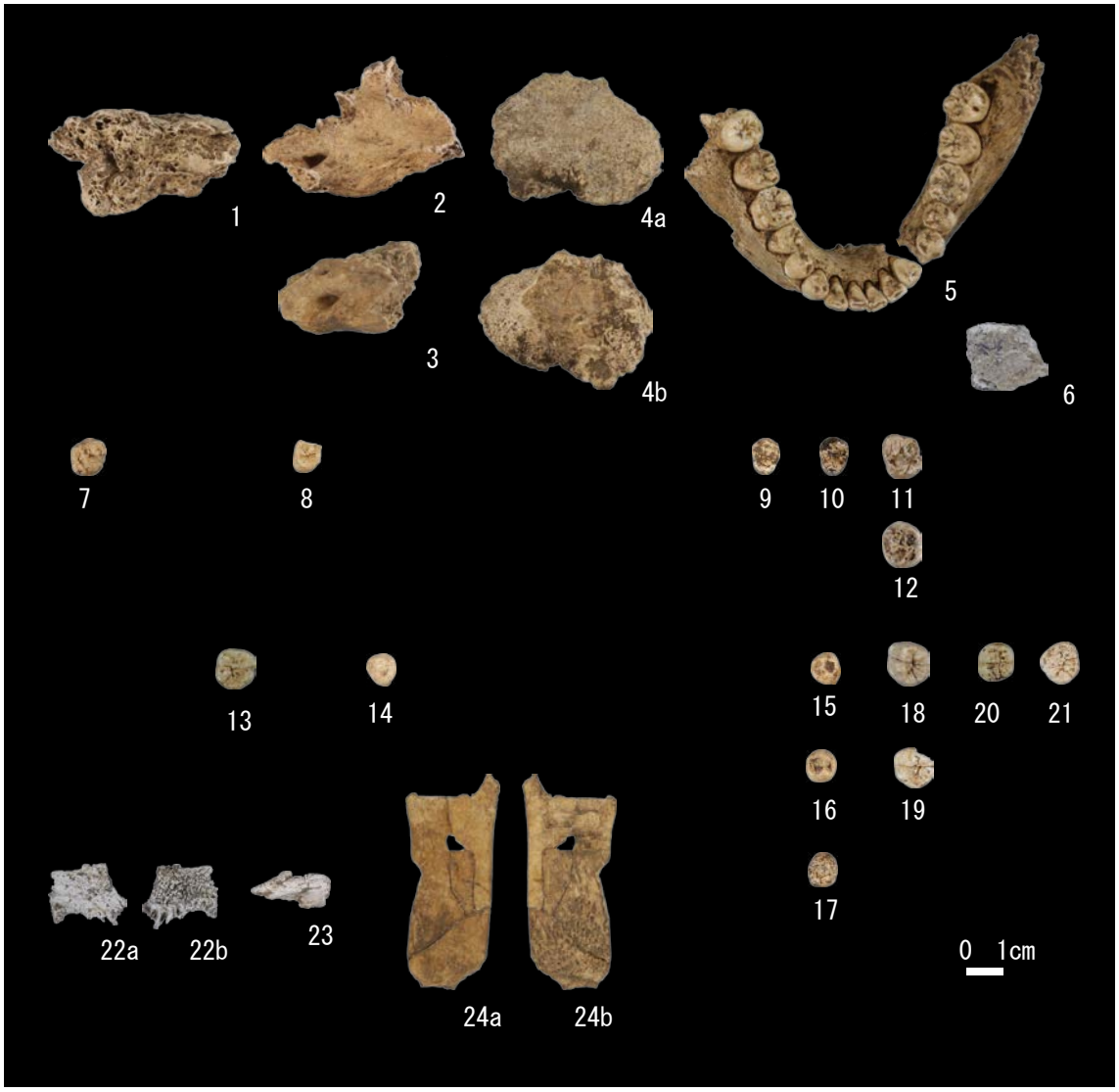
藤田　恒太郎　1949　歯の計測基準について　人類学雑誌 61　p.27-32.

權田　和良　1959　歯の大きさの性差について　人類学雑誌 67　p.151-163.

岡崎　健治　2005　歯冠サイズに基づく未成人骨の性判定―性差の集団間変異の検討と出土人骨への応用―　日本人類学会誌 113　p.139–159.

佐久市教育委員会　2022　佐久市文化財年報 32　64p.

図版 1.　出土骨 (1)



1.ヒト右側頭骨(玄室：B10)
2.ヒト左側頭骨(玄室：B10)
3.ヒト左側頭骨(玄室：B11)
4.ヒト?後頭骨?(石室床面)
5.ヒト左右下顎骨(石室：B25)
6.ヒト?脳頭蓋(礫床床面)
7.ヒト右上顎第3大臼歯(玄室礫床下層)
8.ヒト右上顎第2小臼歯(礫床床面)
9.ヒト左上顎第1小臼歯(石室：B25)
10.ヒト左上顎第2小臼歯(玄室礫床下層)
11.ヒト左上顎第1大臼歯(石室：B24)
12.ヒト左上顎第1大臼歯(礫床床面)
13.ヒト右下顎第1大臼歯(礫床床面)
14.ヒト右下顎第1小臼歯(玄室礫床下層)
15.ヒト左下顎第2小臼歯(石室：B25)
16.ヒト左下顎第2小臼歯(石室：B25)
17.ヒト左下顎第2小臼歯(玄室礫床下層)
18.ヒト左下顎第1大臼歯(石室：B22)
19.ヒト左下顎第1大臼歯(石室：B23)
20.ヒト左下顎第2大臼歯(礫床床面)
21.ヒト左下顎第3大臼歯(玄室礫床下層)
22.哺乳類頭蓋骨?(H1：骨)
23.哺乳類不明(H1Ⅰ区：骨?)
24.哺乳類部位不明(H5Ⅰ区)

図版 2.　出土骨 (2)

1.ヒト右大腿骨(石室：B15)
2.ヒト左大腿骨(石室：B13)
3.ヒト右大腿骨(石室：B14)
4.ヒト左大腿骨(玄室：B1)
5.ヒト右大腿骨(玄室：B2)
6.ヒト左大腿骨(玄室：B3)
7.ヒト左大腿骨(玄室：B4)
8.ヒト右大腿骨(玄室：B5)
9.ヒト左大腿骨(石室：B18)
10.ヒト右大腿骨(玄室：B8)
11.ヒト?四肢骨(玄室：B7)
12.ヒト?四肢骨(石室：B21)

竪穴建物計測表

遺構名	平面形態	規模					主柱			ピット数	カマド		付属施設	堀	重複関係
		主軸方位	長軸長 m	短軸長 m	壁残高 m	面積㎡	柱痕径 m	主柱穴数	柱間寸法		位置	構築方法		方	
H1	—	—	—	—	0.56	—	—	—	—	—	—	—	—	P-1	調査区外に延びる
H2	長方形	N-11°-E	3.31	2.71	0.50	8.86	—	—	—	1	北	粘土・石	周溝	—	H3 を切る
H3	(正方形)	—	(3.01)	(2.87)	0.40	(9.80)	—	—	—	2	—	—	—	—	H2 に切られる
H4	正方形	N-12°-E	4.28	4.06	0.56	20.45	—	4	2.49	—	北	粘土・石	出入口	—	—
H5	長方形	N-11°-E	3.79	2.87	0.39	12.19	—	—	—	—	北東寄	粘土・石	貯蔵穴	—	古墳に切られる
H6	—	—	—	—	0.25	—	—	—	—	1	—	—	—	—	調査区外に延びる
H7	—	—	—	—	0.44	—	—	2	—	—	(北)	—	—	—	トレンチ 3 内 4 内、調査区外に延びる
H8	正方形	N-20°-E	3.71	3.69	0.43	16.78	0.12	4	1.71 ～ 2.31	—	北	粘土・石	貯蔵穴	—	トレンチ 3 内

石棺・土坑計測表

遺構名	平面形態	長軸方位	長軸長 m	短軸長 m	壁残高 m	面積㎡	重複関係
石棺 1	楕円形	N-72°-W	1.14	0.62	0.25	0.34	—
D2	楕円形	N-23°-E	0.74	0.49	0.26	0.08	古墳に切られる

溝計測表

遺構名	最大長 m	最大幅 m	最大深 m	重複関係
M1	(9.60)	0.51	0.12	畑境に切られる
M2	—	0.66	0.38	古墳に切られる
M3	1.64	0.52	0.5	古墳に切られる

古墳計測表

古墳	高 m	幅 m		長 m	
		北幅 m	南幅 m	東長 m	西長 m
玄室	(1.52)	0.95	0.97	1.84	1.85
玄門	—	0.8		0.44	
羨道	—	0.72 ～ 0.73		2.15 ～ 2.20	
墳丘	2.08	(9.18) × (8.77)			

H1 号竪穴建物出土遺物観察表

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
1	土師器	杓状坏	(13.2)	(12.2)	(4.9)	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ	回転実測	覆土
2	土師器	高坏	—	—	〈7.4〉	—	ナデ	ミガキ	回転実測	Ⅲ区
3	土師器	甕	(18.6)	—	〈12.7〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	Ⅱ区
4	土師器	甕	(21.2)	—	〈7.9〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	覆土
5	弥生土器	甕	—	—	—	—	ナデ	櫛描斜走文、櫛描横線文、沈線	破片実測、拓本	ケン
6	弥生土器	壷	—	—	—	—	ナデ	ヘラ描沈線	破片実測、拓本	Ⅰ区
7	鉄製品	不明	2.45	0.9	0.15	0.94	湾曲している		完全実測	焼土の下

H2 号竪穴建物出土遺物観察表

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
1	土師器	坏	12.1	10.5	5.2	—	ナデ	ケズリ	完全実測	No3
2	土師器	坏	14.3	—	5.0	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	完全実測	No2
3	土師器	坏	(14.6)	8.0	〈3.8〉	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ	回転実測	Ⅰ区
4	土師器	高坏	—	(12.2)	〈8.1〉	—	ナデ	ミガキ	回転実測	Ⅳ区床、H3 Ⅱ区
5	土師器	高坏	—	(15.9)	〈8.0〉	—	ナデ	ミガキ	回転実測	Ⅳ区床、H3 Ⅱ区
6	土師器	小型甕	12.0	5.1	12.5	—	ナデ	ケズリ	完全実測	No1
7	土師器	甕	—	(8.2)	〈8.8〉	—	ナデ	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ区床
8	土師器	甑	(20.6)	—	〈16.3〉	—	ミガキ	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅲ、Ⅳ、Ⅳ区床
9	石器	磨石	13.6	8.30	5.30	848.0	磨面２		完全実測	Ⅲ区
10	石器	敲石	13.0	10.10	4.50	805.0	片側～裏面に敲打痕、全体に煤付着、被熱あり		完全実測	Ⅲ区

H3 号竪穴建物出土遺物観察表

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
1	土師器	坏	14.3	10.6	3.8	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ、口縁部ミガキ	回転実測	Ⅰ区
2	土師器	坏	14.9	9.3	3.7	—	ミガキ→黒色処理	ミガキ	回転実測	No2
3	土師器	甕	(14.4)	(5.8)	11.0	—	ナデ	ケズリ	回転実測	Ⅰ区
4	土師器	甕	(23.4)	—	〈13.2〉	—	ナデ	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅱ、Ⅲ区、H2 Ⅳ区床
5	土師器	甑	(20.8)	—	〈21.4〉	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅱ区、H2 Ⅲ、Ⅳ区床
6	土師器	甑	22.8	6.8	17.7	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	完全実測	No1
7	縄文土器	—	—	—	—	—	—		破片実測、拓本	Ⅱ区

H4 号竪穴建物出土遺物観察表 (1)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
1	土師器	坏	12.0	12.8	4.4	—	黒色処理	ケズリ	完全実測	No3
2	土師器	坏	(12.4)	(8.2)	(3.9)	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅳ区

H4 号竪穴建物出土遺物観察表 (2)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
3	土師器	坏	(12.8)	(12.0)	4.0	—	ナデ	ケズリ	回転実測	Ⅲ区
4	土師器	坏	(13.6)	—	(5.0)	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅱ区
5	土師器	坏	(13.8)	(11.0)	4.1	—	ミガキ→黒色処理	ミガキ	回転実測	Ⅲ区
6	土師器	坏	14.8	9.0	3.6	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	完全実測	No10
7	土師器	坏	(14.8)	(10.4)	(3.6)	—	ミガキ→黒色処理	ミガキ	回転実測	Ⅱ区
8	土師器	坏	(15.2)	(7.8)	4.3	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	回転実測	No4、7、Ⅰ区
9	土師器	坏	15.2	9.2	4.3	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	完全実測	No9、10、Ⅱ区
10	土師器	坏	(16.0)	(10.4)	(3.7)	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅲ、Ⅳ区
11	土師器	坏	16.1	8.5	4.4	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	完全実測	Ⅲ区
12	土師器	坏	16.6	9.6	3.6	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	完全実測	No8
13	土師器	高坏	—	—	(5.9)	—	ナデ	ミガキ	回転実測	Ⅳ区
14	土師器	高坏	—	—	(6.9)	—	しぼり	ミガキ	回転実測	Ⅱ、Ⅲ区
15	土師器	高坏	—	—	—	—	暗文状ヘラミガキ	暗文状ヘラミガキ	破片実測	ケン
16	土師器	鉢	11.8	14.8	8.9	—	ミガキ	ミガキ→ケズリ	完全実測	No14
17	土師器	鉢	12.4	4.8	8.0	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ	回転実測	No5
18	土師器	鉢	19.2	—	9.8	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	完全実測	Ⅱ、Ⅲ区、P4
19	土師器	鉢	—	—	—	—	—	—	破片実測、拓本、穿孔あり	No10
20	土師器	小型甕	11.7	5.4	9.3	—	ナデ	ケズリ	完全実測	No2
21	土師器	甕	19.0	4.4	38.0	—	ナデ	ケズリ、木葉痕	完全実測、拓本	No13、Ⅱ区
22	土師器	甕	(21.3)	6.1	31.8	—	ナデ	ケズリ、木葉痕	完全実測、拓本	No12、Ⅱ区
23	土師器	甕	22.4	—	(31.0)	—	ナデ	ケズリ	完全実測	No11、13、15、16、Ⅰ区
24	土師器	壺	12.0	9.1	13.4	—	ミガキ	ミガキ、穿孔 (1 対)	完全実測	No4
25	土師器	壺	(12.8)	—	(2.8)	—	暗文状ヘラミガキ	暗文状ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区
26	土師器	壺	—	—	(16.8)	—	ケズリ	ミガキ	回転実測	Ⅱ区
27	土師器	甑	17.8	—	10.0	—	ナデ	ケズリ、単孔	完全実測	No6
28	石器	台石	27.40	13.00	6.70	3620.00	使用面 1		完全実測	No17
29	石器	磨石	7.90	3.90	3.60	164.10	全体に磨り		完全実測	Ⅰ区
30	石器	磨石	8.60	6.20	3.60	220.50	磨り面 1		完全実測	Ⅲ区
31	鉄器	鏃	〈7.20〉	〈1.50〉	〈0.50〉	〈12.50〉	茎部欠損、木質残る		完全実測	No1

H5 号竪穴建物出土遺物観察表 (1)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
1	土師器	坏	(12.4)	(12.6)	4.7	—	ミガキ	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅰ、Ⅳ区
2	土師器	坏	(14.0)	(10.8)	〈3.8〉	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ	回転実測	Ⅲ区
3	土師器	坏	(14.4)	(12.0)	〈3.9〉	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅱ区、カマド
4	土師器	坏	(15.0)	(12.6)	4.6	—	黒色処理	ケズリ	回転実測	Ⅳ区

H5 号竪穴建物出土遺物観察表 (2)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
5	土師器	坏	(15.4)	(13.4)	〈3.1〉	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ	回転実測	Ⅲ区
6	土師器	甕	19.5	6.5	29.8	—	ナデ	ケズリ	回転実測	No5、Ⅱ、Ⅳ区
7	土師器	甕	—	4.8	〈12.8〉	—	ナデ	ケズリ→ミガキ、下半部沈線	回転実測	No4、Ⅲ区
8	土師器	甕	—	6.3	〈14.3〉	—	ナデ	ケズリ→ミガキ	回転実測	No2、Ⅰ区
9	土師器	甕	—	(7.2)	〈6.5〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	Ⅱ区
10	土師器	壷	(15.0)	—	〈14.7〉	—	ミガキ	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅱ区、カマド、羨道礫下層
11	土師器	壷	(26.8)	—	〈12.9〉	—	ミガキ	ミガキ	回転実測	カマド、墳丘Ⅲ区、カクラン
12	土師器	甑	(21.0)	(7.8)	24.6	—	ミガキ	ケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅲ、Ⅳ区
13	土師器	甑	(22.0)	—	〈11.9〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	No1
14	土師器	甑	28.6	9.0	29.0	—	ミガキ	ケズリ→ミガキ	完全実測	No3、Ⅰ、Ⅱ区
15	石器	編物石	12.0	6.0	3.3	242.0	—		完全実測	Ⅰ区
16	石器	打製石斧	9.3	6.0	1.85	92.2	刃部を中心に摩滅痕、自然面残る		完全実測	Ⅲ区

H6 号竪穴建物出土遺物観察表

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
1	土師器	坏	(14.6)	(13.0)	〈4.6〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	W 区
2	土師器	甕	(16.2)	—	〈5.7〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	W 区
3	土師器	甕	(22.0)	—	〈12.0〉	—	ミガキ	ケズリ→ミガキ	回転実測	E、W 区、ケン
4	石器	磨石	〈12.40〉	〈4.10〉	〈5.40〉	〈413.0〉	磨り面３(コの字状)		完全実測	W 区
5	鉄器	鉄塊	4.30	2.10	0.70	17.30	—		完全実測	No2
6	古銭	銀銭	2.60	1.50	0.25	9.98	「古南　二朱銀」		完全実測、拓本	No1

H7 号竪穴建物出土遺物観察表 (1)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
1	土師器	坏	(9.2)	—	〈6.1〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	ホリ
2	土師器	坏	(12.4)	(11.8)	〈5.5〉	—	暗文状ヘラミガキ	ケズリ	回転実測	カマド
3	土師器	坏	(13.2)	(8.6)	〈4.8〉	—	暗文状ヘラミガキ	ケズリ	回転実測	覆土
4	土師器	坏	(14.4)	—	〈4.8〉	—	ミガキ	ミガキ	回転実測	覆土
5	土師器	坏	(14.6)	—	〈5.0〉	—	ナデ	ハケメ	回転実測	覆土
6	土師器	坏	(15.0)	—	〈8.5〉	—	暗文状ヘラミガキ	ケズリ→ミガキ	回転実測	カマド、E 区ケン
7	土師器	坏	(16.2)	—	6.7	—	暗文状ヘラミガキ	ケズリ→ミガキ	回転実測	E 区ケン
8	土師器	坏	(18.4)	—	〈6.1〉	—	ミガキ	ミガキ	回転実測	カマド
9	土師器	坏	(19.6)	—	〈5.6〉	—	ミガキ→黒色処理	ナデ	回転実測	W 区ケン
10	土師器	坏	(20.0)	—	〈5.8〉	—	ミガキ→黒色処理	ナデ	回転実測	覆土
11	土師器	坏	—	—	—	—	墨書	ケズリ	破片実測	E 区ケン

H7 号竪穴建物出土遺物観察表 (2)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
12	土師器	椀	(17.2)	—	〈7.2〉	—	ミガキ→黒色処理	ナデ	回転実測	W 区ケン
13	土師器	高坏	—	—	〈5.0〉	—	ナデ	ナデ	回転実測	覆土
14	須恵器	坏	(13.8)	—	〈3.7〉	—	ナデ	ナデ	回転実測	W 区ケン
15	須恵器	坏	—	6.7	〈1.4〉	—	ナデ	右回転糸切	完全実測	W 区ケン
16	土師器	片口鉢	(11.0)	—	〈5.1〉	—	ナデ	ナデ	回転実測	ホリ
17	土師器	甕	—	(5.0)	〈15.4〉	—	ナデ	ハケメ→ミガキ	回転実測	カマド
18	土師器	壺	—	(8.4)	〈14.9〉	—	ナデ	ケズリ→ミガキ	回転実測	E 区ケン
19	土師器	壺	—	—	〈10.4〉	—	ハケメ	ケズリ→ミガキ	回転実測	E 区ケン
20	土師器	ハソウ	9.5	—	〈9.8〉	—	ミガキ	ケズリ→ミガキ	完全実測	No1
21	土師器	甑	—	(10.6)	〈7.8〉	—	ミガキ	ミガキ	回転実測	E 区ケン
22	石器	磨石	9.10	4.10	3.10	187.00	全体に磨り		完全実測	覆土
23	石器	磨・敲石	10.40	5.40	2.60	217.00	全体に磨り、端部に敲打痕		完全実測	E 区ケン
24	鉄器	鏃	〈11.70〉	〈0.90〉	〈0.50〉	〈13.60〉	鏃身部欠損		完全実測	No2

H8 号竪穴建物出土遺物観察表 (1)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
1	土師器	坏	12.2	—	7.1	—	ミガキ→黒色処理	ミガキ	回転実測	カマド
2	土師器	坏	(12.2)	(12.4)	(5.2)	—	ミガキ	ケズリ	回転実測	カマド
3	土師器	坏	12.3	—	5.3	—	ミガキ	ケズリ→ミガキ	完全実測	No3、4
4	土師器	坏	(13.2)	(13.6)	〈4.3〉	—	ミガキ	ケズリ	回転実測	カマド
5	土師器	坏	13.8	—	4.3	—	ナデ→ミガキ	ケズリ→ミガキ	完全実測	No5
6	土師器	坏	(14.6)	(11.6)	〈4.5〉	—	ミガキ→黒色処理	ケズリ→ミガキ	回転実測	トレンチ 1
7	土師器	坏	(14.8)	(13.6)	〈3.4〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	トレンチ 1
8	土師器	坏	16.0	—	4.6	—	ミガキ	ケズリ→ミガキ	完全実測	No3、カマド
9	土師器	高坏	—	—	〈5.9〉	—	ナデ	剥離	完全実測	ケン
10	土師器	鉢	14.8	—	10.9	—	ミガキ、煤付着	ミガキ、煤付着	完全実測	No2
11	土師器	甕	14.0	5.1	14.8	—	ナデ	ハケメ、底部～体部ケズリ	回転実測	No8、カマド
12	土師器	甕	(15.0)	—	〈12.2〉	—	ナデ	ハケメ→ミガキ	回転実測	カマド
13	土師器	甕	16.2	6.5	15.7	—	ナデ	ケズリ	完全実測、口縁歪み（楕円）	No9
14	土師器	甕	(17.2)	6.0	28.8	—	ナデ	ケズリ→ミガキ	完全実測	カマド
15	土師器	甕	(17.8)	(7.0)	(30.0)	—	剥離	ケズリ→ミガキ	回転実測	No10、ケン
16	土師器	甕	(19.0)	6.8	14.2	—	ハケメ→ナデ	ミガキ	完全実測、口縁歪み？（楕円）	No1
17	土師器	甕	(26.0)	—	〈21.3〉	—	ハケメ	ハケメ	回転実測	覆土
18	土師器	甕	—	—	〈4.1〉	—	ナデ	ナデ (ハケメ残)	回転実測	覆土
19	土師器	甕	—	—	〈11.4〉	—	ナデ	ミガキ	回転実測	覆土
20	土師器	壺	8.0	—	13.0	—	ミガキ	ミガキ	完全実測	No6

H8 号竪穴建物出土遺物観察表 (2)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
21	土師器	壺	14.6	—	14.1	—	ミガキ	ミガキ	回転実測	No7
22	土師器	甑	25.9	7.9	26.4	—	ナデ	ナデ	完全実測	No3、カマド
23	土師器	?	—	—	—	—	—	—	破片実測、拓本	ケン
24	弥生土器	甕	—	—	—	—	ミガキ	櫛描簾状文、櫛描波状文	破片実測、拓本	覆土
25	石器	台石	26.60	〈19.6〉	〈3.80〉	〈3.07〉	使用面１、両側に欠損		完全実測	覆土
26	石器	磨石	3.80	2.50	1.20	13.30	全体に磨り		完全実測	覆土
27	石器	編物石	11.20	5.60	3.40	271.0	—		完全実測	覆土
28	石器	編物石	11.70	5.60	5.70	470.0	—		完全実測	覆土
29	石器	編物石	12.20	6.30	4.20	496.50	—		完全実測	覆土
30	石器	編物石	12.90	6.40	4.10	469.0	—		完全実測	覆土
31	石器	編物石	13.60	6.10	3.50	415.0	—		完全実測	覆土
32	石器	編物石	13.70	6.60	3.60	522.0	—		完全実測	覆土
33	石器	編物石	14.00	5.80	4.90	626.0	—		完全実測	覆土
34	石器	編物石	14.00	6.60	3.80	451.0	—		完全実測	覆土
35	石器	編物石	14.20	5.90	5.10	569.0	側面に抉り、端部に使用痕		完全実測	覆土
36	石器	編物石	15.10	5.40	4.80	575.0	—		完全実測	覆土
37	石器	編物石	15.30	5.50	3.00	396.0	—		完全実測	覆土
38	石製品	剣形模造品	3.10	1.10	0.30	1.87	孔φ 0.10 ～ 0.20、２孔あり		完全実測	覆土
39	石製品	剣形模造品	5.60	2.40	0.80	13.70	孔φ 0.20、鎬あり、未成品？		完全実測	覆土

古墳出土遺物観察表 (1)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
1	土師器	高坏	(12.6)	—	〈3.4〉	—	黒色処理	ケズリ	回転実測	玄室
2	土師器	高坏	(16.0)	—	〈5.2〉	—	ミガキ	ケズリ→ミガキ	回転実測	玄室
3	土師器	高坏	18.6	—	〈7.0〉	—	ミガキ	ミガキ	完全実測	墳丘Ⅳ区
4	土師器	高坏	—	10.5	〈6.4〉	—	ミガキ→黒色処理、脚部ケズリ	ケズリ→ミガキ	完全実測	玄室
5	土師器	高坏	—	(14.2)	〈2.0〉	—	ナデ	ミガキ	回転実測	墳丘Ⅲ区
6	土師器	高坏	—	—	〈6.5〉	—	剥落	ミガキ	回転実測	ケン
7	須恵器	坏	(12.2)	(9.2)	3.9	—	ロクロナデ	回転ヘラ切	回転実測	玄室
8	須恵器	坏	(14.4)	(8.4)	〈4.1〉	—	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	回転実測	玄室、羨道礫床下層
9	須恵器	有台坏	—	(8.2)	〈2.7〉	—	ロクロナデ	回転糸切→付高台	回転実測	墳丘Ⅱ区、E 区ケン
10	須恵器	坏蓋	(13.0)	—	〈2.9〉	—	火襷	ケズリ、火襷	回転実測	カクラン
11	須恵器	坏蓋	—	—	〈2.1〉	—	ロクロナデ	回転ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	墳丘Ⅲ区
12	須恵器	坏蓋	—	—	〈2.2〉	—	ロクロナデ	回転ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	カクラン
13	土師器	鉢	(15.0)	—	〈4.7〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	墳丘、墳丘Ⅳ区
14	土師器	甕	(22.6)	—	〈6.0〉	—	ナデ	ナデ	回転実測	ケン

古墳出土遺物観察表 (2)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
15	土師器	甕	—	9.7	〈4.6〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	カクラン
16	土師器	甕	—	—	—	—	ナデ	ナデ	破片実測	墳丘
17	須恵器	甕	(23.0)	—	〈9.3〉	—	当具痕 (同心円文)	叩き、口縁櫛描波状文	回転実測	カクラン
18	須恵器	甕	—	(18.6)	〈5.8〉	—	ロクロナデ	底部周縁回転ヘラケズリ、叩き	回転実測	ケン
19	須恵器	甕	—	—	—	—	ロクロナデ	櫛描波状文	破片実測、拓本	墳丘Ⅱ区
20	須恵器	甕	—	—	—	—	ロクロナデ	櫛描波状文	破片実測、拓本	カクラン
21	須恵器	甕	—	—	—	—	ロクロナデ	叩き	破片実測、拓本	ケン
22	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕 (同心円文)	叩き	破片実測、拓本	カクラン
23	須恵器	壷	—	(14.0)	〈7.4〉	—	ロクロナデ	切離し→付高台、重焼痕	回転実測	カクラン
24	須恵器	壷	—	(12.0)	〈4.4〉	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	カクラン
25	須恵器	壷	—	—	〈5.4〉	—	ロクロナデ	付着物有	回転実測	カクラン
26	須恵器	壷	—	—	〈6.9〉	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	墳丘Ⅱ区、カクラン
27	縄文土器	鉢	—	—	—	—	後期堀之内、口唇部横位沈線		破片実測、拓本	カクラン
28	縄文土器	鉢	—	—	—	—	後期堀之内、鎖状隆帯		破片実測、拓本	玄室
29	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	後期堀之内、沈線文		破片実測、拓本	カクラン
30	石器	砥石	〈6.60〉	〈2.80〉	〈2.30〉	〈58.00〉	上下欠損、砥面数 4		完全実測	墳丘
31	石器	台石	〈10.60〉	〈7.90〉	〈8.70〉	〈962.00〉	全周～裏面欠損、使用面 1		完全実測	カクラン
32	石器	台石	〈17.10〉	〈8.90〉	〈4.30〉	〈949.00〉	全周～裏面欠損、使用面 1		完全実測	カクラン
33	石器	磨石	〈7.30〉	〈3.30〉	〈1.30〉	〈283.00〉	全周～裏面欠損、磨り面 1		完全実測	羨道礫床下層
34	石器	石鏃	〈1.10〉	〈0.90〉	〈0.25〉	〈0.20〉	片脚のみ残存、黒曜石		完全実測	礫下層
35	？	硯	13.90	7.80	2.60	〈475.50〉	一部欠損、裏面に線刻、文字？		完全実測、拓本	カクラン
36	石器・石製品	不明	〈7.30〉	〈4.90〉	〈0.25〉	〈13.40〉	下辺を残し欠損、端部Ｖ字に加工、擦痕顕著		完全実測	墳丘
37	石製品	勾玉	2.40	1.50	0.65	2.66	孔φ 0.20 ～ 0.40		完全実測	玄室
38	石製品	勾玉	〈3.60〉	〈2.20〉	〈1.00〉	〈9.13〉	孔φ 0.15、一部欠損		完全実測	玄室、勾玉 1
39	石製品	切子玉	1.95	1.90	1.65	8.36	孔φ 0.15 ～ 0.45		完全実測	玄室
40	石製品	切子玉	2.60	1.50	1.30	6.66	孔φ 0.10 ～ 0.40		完全実測	玄室
41	石製品	丸玉	0.85	0.85	0.60	0.75	孔φ 0.25		完全実測	玄室
42	ガラス製品	小玉	0.30	0.30	0.20	0.05	孔φ 0.10 ～ 0.40		完全実測	入口
43	ガラス製品	小玉	0.30	0.30	0.25	0.07	孔φ 0.10		完全実測	入口
44	ガラス製品	小玉	0.30	0.30	0.30	0.05	孔φ 0.15 ～ 0.45		完全実測	入口
45	ガラス製品	小玉	0.30	0.40	0.20	0.04	孔φ 0.15、歪んでいる		完全実測	入口
46	ガラス製品	小玉	0.35	0.35	0.20	0.03	孔φ 0.10		完全実測	入口
47	ガラス製品	小玉	0.35	0.35	0.25	0.07	孔φ 0.15、突起が残る		完全実測	入口
48	ガラス製品	小玉	0.35	0.35	0.15	0.04	孔φ 0.10		完全実測	入口
49	ガラス製品	小玉	0.35	0.35	0.20	0.05	孔φ 0.10		完全実測	入口
50	ガラス製品	小玉	0.40	0.40	0.25	0.04	孔φ 0.15		完全実測	入口
51	ガラス製品	小玉	0.45	0.45	0.20	0.06	孔φ 0.15		完全実測	入口

古墳出土遺物観察表 (3)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
52	ガラス製品	小玉	(0.35)	(0.35)	〈0.25〉	〈0.05〉	孔φ (0.10)、同一個体１片		完全実測	入口
53	ガラス製品	小玉	(0.35)	(0.35)	〈0.20〉	〈0.05〉	孔φ (0.10)、同一個体３片		完全実測	玄室
54	ガラス製品	小玉	(0.35)	(0.35)	〈0.20〉	〈0.03〉	同一個体３片		完全実測	玄室
55	ガラス製品	小玉	(0.35)	(0.35)	〈0.20〉	〈0.04〉	同一個体３片		完全実測	玄室
56	石製模造品	臼玉	0.40	0.40	0.10	0.06	孔φ 0.10		完全実測	玄室礫床下層
57	石製模造品	臼玉	〈0.50〉	〈0.30〉	〈0.10〉	〈0.04〉	孔φ (0.20) 推定、片側欠損		完全実測	礫床下層
58	鉄器	刀子	〈2.60〉	〈0.70〉	〈0.20〉	〈1.20〉	両端欠損		完全実測	鉄 No5
59	鉄器	刀子	〈4.50〉	〈1.20〉	〈0.40〉	〈3.70〉	両端欠損		完全実測	鉄 No3
60	鉄器	刀子	〈5.40〉	〈2.30〉	〈1.50〉	〈13.70〉	両端欠損、口金・木質残存		完全実測	入口床面
61	鉄器	鉄鏃	〈3.10〉	〈1.30〉	〈0.40〉	〈2.20〉	鏃身部・先端・片脚欠損		完全実測	礫床面
62	鉄器	鉄鏃	〈3.30〉	〈2.20〉	〈0.25〉	〈2.80〉	孔φ 0.15、先端・基部欠損		完全実測	礫床下層
63	鉄器	鉄鏃	〈3.60〉	〈2.30〉	〈0.25〉	〈3.30〉	孔φ 0.30、両脚欠損		完全実測	礫床下層
64	鉄器	鉄鏃	〈4.60〉	〈1.00〉	〈0.35〉	〈3.00〉	鏃身部・茎部欠損		完全実測	玄室礫床下層
65	鉄器	鉄鏃	〈2.40〉	〈0.60〉	〈0.40〉	〈1.96〉	両端欠損		完全実測	玄室礫床下層
66	鉄器	鉄鏃	〈3.20〉	〈0.60〉	〈0.50〉	〈1.80〉	両端欠損		完全実測	礫床面
67	鉄器	鉄鏃	〈3.70〉	〈0.70〉	〈0.60〉	〈3.40〉	両端欠損		完全実測	羨道礫床下層
68	鉄器	鉄鏃	〈4.10〉	〈0.60〉	〈0.40〉	〈3.10〉	両端欠損		完全実測	鉄 No7
69	鉄器	鉄鏃	〈4.20〉	〈1.40〉	〈0.80〉	〈4.50〉	３個体付着？		完全実測	鉄 No8
70	鉄器	鉄鏃	〈4.30〉	〈1.00〉	〈0.60〉	〈5.20〉	両端欠損、付着物有		完全実測	鉄 No11
71	鉄器	鉄鏃	〈4.50〉	〈1.30〉	〈0.60〉	〈4.80〉	上下欠損、木質残存		完全実測	鉄 No4
72	鉄器	鉄鏃	〈4.70〉	〈0.80〉	〈0.40〉	〈2.40〉	関部より上欠損		完全実測	礫床面
73	鉄器	鉄鏃	〈4.90〉	〈0.70〉	〈0.50〉	〈2.30〉	両端欠損		完全実測	玄室礫床下層
74	鉄器	鉄鏃	〈5.00〉	〈0.70〉	〈0.40〉	〈3.00〉	両端欠損		完全実測	玄室礫床下層
75	鉄器	鉄鏃	〈5.10〉	〈1.00〉	〈0.50〉	〈4.70〉	両端欠損		完全実測	羨道礫床下層
76	鉄器	鉄鏃	〈6.10〉	〈1.00〉	〈0.40〉	〈5.00〉	両端欠損		完全実測	鉄 No15
77	鉄器	鉄鏃	〈8.40〉	〈0.60〉	〈0.40〉	〈6.00〉	両端欠損		完全実測	玄室、礫床下層
78	鉄器	鉄鏃	〈10.80〉	〈1.00〉	〈0.50〉	〈8.70〉	茎部欠損		完全実測	玄室礫床下層
79	鉄器	鉄鏃	〈5.70〉 〈4.50〉	〈0.90〉 〈0.60〉	〈0.50〉	〈8.50〉	同一個体と思われる		完全実測	玄室礫床下層
80	鉄器	鎌？	〈3.80〉	〈2.00〉	〈0.25〉	〈3.80〉	両端欠損		完全実測	鉄 No9
81	鉄器	刀	〈10.00〉	〈2.10〉	〈0.65〉	〈28.80〉	両端欠損		完全実測	鉄 No6
82	鉄器	刀	〈11.10〉	〈1.90〉	〈0.75〉	〈33.20〉	片端欠損		完全実測	玄室礫床下層
83	鉄器	刀	〈78.10〉	〈3.50〉	〈2.00〉	〈490.00〉	刃先・その他欠損		完全実測	鉄 No2
84	鉄器・鉄製品	刀	〈80.75〉	〈6.00〉	〈2.10〉	〈670.00〉	刃部欠損、目釘・木質残存		完全実測	鉄 No1
		鞘尻金具	〈4.50〉	〈3.30〉	〈2.00〉	〈20.00〉	片脚欠損、内面に木質残存			
85	鉄製品	鏃？	〈1.90〉	〈2.40〉	〈0.10〉	〈1.50〉	片側以外欠損		完全実測	礫床面
86	鉄製品	鏃？	〈2.40〉	〈2.00〉	〈0.10〉	〈2.30〉	両側以外欠損		完全実測	玄室礫床下層

古墳出土遺物観察表 (4)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
87	鉄製品	鏃？	〈2.50〉	〈3.00〉	〈0.20〉	〈2.60〉	片側以外欠損？		完全実測	玄室礫床下層
88	鉄製品	鏃？	〈3.05〉	〈2.70〉	〈0.50〉	〈0.27〉	素材厚〈0.10〉、両側以外欠損、内側に木質残存		完全実測	鉄 No10
89	鉄製品	切羽？	〈3.80〉	〈2.40〉	〈0.20〉	〈7.60〉	同一個体と思われる		完全実測	玄室礫床下層
			〈2.50〉	〈3.00〉	〈0.20〉					
90	鉄製品	口金具？	〈2.40〉	〈1.60〉	〈0.30〉	〈2.70〉	両端欠損、内側に木質残存、銅製金具付着？		完全実測	礫床面
91	鉄製品	口金具？	〈2.40〉	〈1.90〉	〈0.70〉	〈7.40〉	下部欠損、内側に木質残存		完全実測	玄室礫床下層
92	鉄製品	小札？	〈3.10〉	〈2.60〉	〈0.20〉	〈2.50〉	同一個体と思われる、下部欠損		完全実測	礫床面
			〈2.40〉	〈2.20〉	〈0.25〉	〈2.40〉				
93	鉄製品	鍋？	〈6.80〉	〈8.40〉	〈0.50〉	〈62.79〉	—		完全実測	古墳西側周溝確認
94	鉄器・鉄製品	不明	1.80	1.00	0.25	0.46	—		完全実測	玄室
95	鉄器・鉄製品	不明	〈2.40〉	〈1.50〉	〈0.50〉	〈1.70〉	周囲欠損、木質残存		完全実測	玄室床
96	鉄器・鉄製品	不明	〈2.80〉	〈0.80〉	〈0.20〉	〈1.40〉	両脚欠損		完全実測	礫床面
97	鉄器・鉄製品	不明	〈3.20〉	〈0.60〉	〈0.40〉	〈1.30〉	全周～裏面欠損		完全実測	礫床面
98	鉄器・鉄製品	不明	〈3.10〉	〈2.50〉	〈0.50〉	〈4.70〉	両脚欠損		完全実測	礫床面
99	銅製品	耳環	2.20	2.40	0.60	10.37	銅芯金張		完全実測	玄室入口床面
100	銅製品	耳環	2.25	2.50	0.65	18.84	銅芯金張		完全実測	玄室
101	銅製品	耳環	2.30	2.50	0.65	11.61	銅芯金張		完全実測	礫層Ⅲ区
102	銅製品	耳環	2.40	2.65	0.65	13.79	銅芯金張		完全実測	玄室
103	銅製品	耳環	2.50	2.70	0.70	14.90	銅芯金張		完全実測	玄室

遺構外出土遺物観察表

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
1	弥生土器	壷	—	—	—	—	ナデ (ハケメ残)	ヘラ描斜走文	破片実測、拓本	トレンチ 2
1	土師器	坏	(16.6)	(15.0)	〈5.4〉	—	ミガキ	ケズリ	回転実測	トレンチ 2
2	土師器	高坏	—	—	〈5.5〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測、円孔透 4	トレンチ 2
3	土師器	壷	—	—	〈3.5〉	—	ナデ	ケズリ	回転実測	トレンチ 2
1	鉄器・鉄製品・銅製品	不明	11.60	1.60	0.80	28.93	—		完全実測	トレンチ 3
2	鉄器・鉄製品・銅製品	古銭	φ 2.40	—	0.10	4.19	「永楽通宝」		完全実測、拓本	Z
3	鉄器・鉄製品・銅製品	古銭	φ 2.20	—	0.10	3.23	「洪武通宝」		完全実測、拓本	Z

Ｈ１号竪穴建物　鉄滓・焼土検出状況

Ｈ１号竪穴建物　完掘

Ｈ２号竪穴建物　完掘

Ｈ２号竪穴建物　カマド

Ｈ３号竪穴建物　完掘

Ｈ４号竪穴建物　遺物出土状況

Ｈ４号竪穴建物　完掘

Ｈ４号竪穴建物　カマド

Ｈ５号竪穴建物　完掘

Ｈ５号竪穴建物　カマド

Ｈ６号竪穴建物　完掘

Ｈ７号竪穴建物　完掘

Ｍ１号溝

Ｈ８号竪穴建物　完掘

Ｈ８号竪穴建物　カマド

Ｄ１号土坑　石棺

Ｍ２号溝

Ｄ２号土坑

Ｍ３号溝

古墳検出状況（西から）

古墳　石室検出状況（南から）

古墳　墳丘西断面

古墳　完掘状況（東から）

古墳　羨門の横倒状況

古墳　直刀出土状況

古墳　玄室礫床（北から）

古墳　下顎出土状況

←古墳　西玄門

↑古墳　玄門 (玄室方向から)

↓古墳　東玄門

古墳　入口方向を臨む（北から）

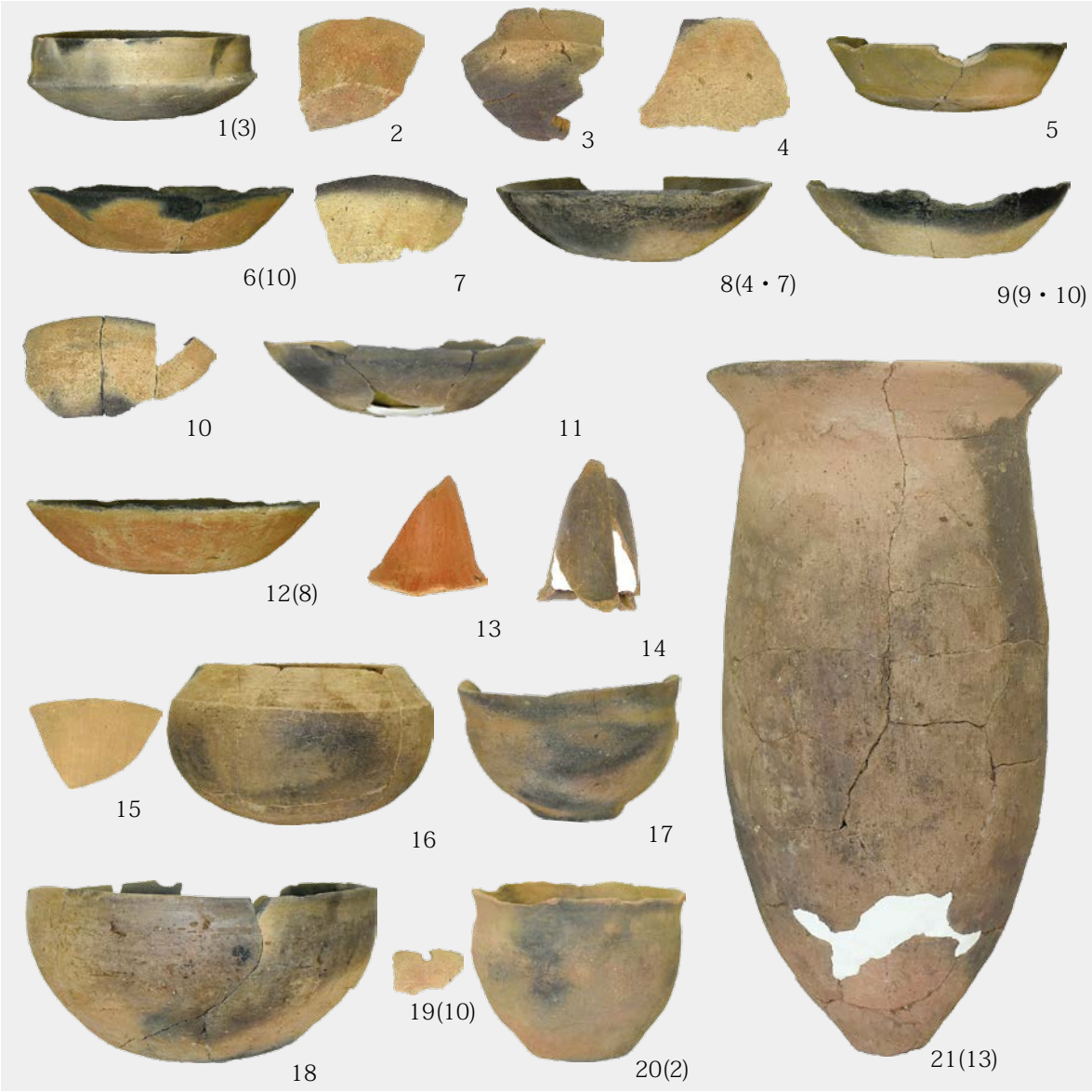
古墳　奥壁石の加工痕

H 1 号竪穴建物出土遺物

H 2 号竪穴建物出土遺物

H 3 号竪穴建物出土遺物 (1)

Ｈ３号竪穴建物出土遺物 (2)



Ｈ４号竪穴建物出土遺物 (1)

H 4 号竪穴建物出土遺物 (2)

H 5 号竪穴建物出土遺物 (1)

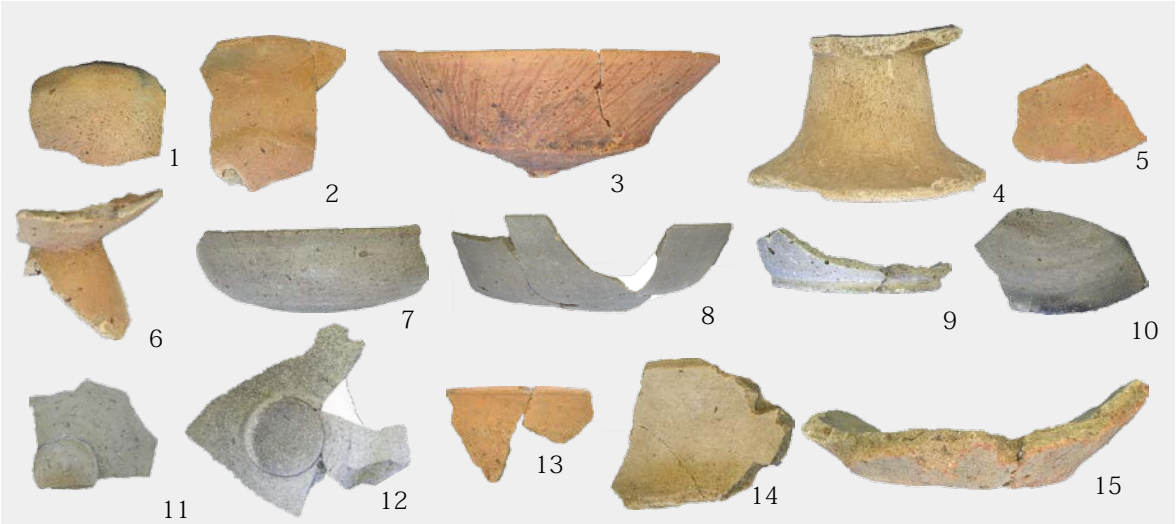
Ｈ５号竪穴建物出土遺物 (2)

Ｈ６号竪穴建物出土遺物

H 7 号竪穴建物出土遺物

Ｈ８号竪穴建物出土遺物 (1)

H 8 号竪穴建物出土遺物 (2)



古墳出土遺物 (1)

16
17
18
19
20
22
21
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34(原寸)
35
36
58(5)(1/2)
59(3)(1/2)
60(1/2)
61(1/2)
62(1/2)
63(1/2)
64(1/2)
65(1/2)
66(1/2)
67(1/2)
68(7)(1/2)
69(8)(1/2)
70(11)(1/2)
71(4)(1/2)
72(1/2)
73(1/2)
74(1/2)
75(1/2)
76(15)(1/2)
77(1/2)
78(1/2)
79(1/2)
80(9)(1/2)
81(6)(1/2)
85(1/2)
86(1/2)
87(1/2)

古墳出土遺物 (2)

古墳出土遺物 (3)

遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たたみばたけいせき
書名	畳畑遺跡
副書名	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 307 集
編著者名	小林眞寿
編集機関	佐久市教育委員会　文化振興課
所在地	長野県佐久市中込 2913　℡ 0267-63-5321　FAX0267-63-5322
発行年月日	令和 6 年（2024）3 月

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たたみばたけいせき	さくしなるせ	20217	203	36° 17'02.9"	138° 27'34.35"	20221025 ～ 20221207	985㎡	橋梁架替
畳畑遺跡	佐久市鳴瀬 3368 他							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畳畑遺跡 畳畑古墳	集落址 古　墳	古墳時代 5 ～ 6C 古墳時代後期 7C	竪穴建物 -8 軒 土坑 -1 基 石棺 -1 基 溝 -3 条 古墳 -1 基	縄文土器　弥生土器 土師器　須恵器 石器・石製品　金属器 土製品　玉類　人骨	未周知古墳の発見

要約	製鉄址の可能性が高い竪穴遺構の検出、及び同時期（古墳時代 5 世紀から 6 世紀）集落の調査。未周知古墳（7 世紀後半）の発見・調査。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 307 集

畳畑遺跡

令和 6 年 3 月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒 385-8501　長野県佐久市中込 3056
社会教育部　文化振興課　文化財事務所
〒 385-0051　長野県佐久市中込 2913
℡ 0267-63-5321
印刷所　キクハラインク有限会社